

41614

教科書文庫

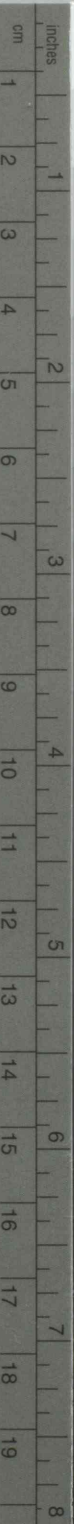
| |
|------------|
| 4 |
| 810 |
| 41-1938 |
| 2000301579 |

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

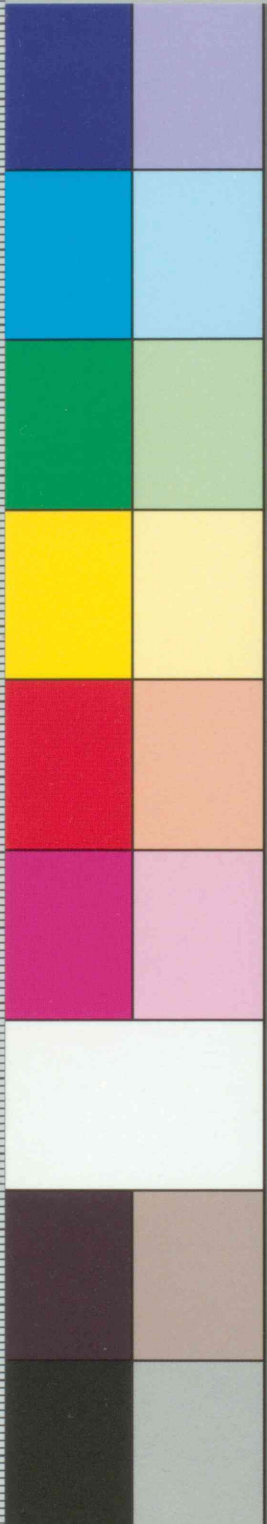
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black



3759
I91
資料室



紙山園語讀本

改訂版

卷二



資料室

2759
I91

濟定檢省部文

附科文漢語國校學中 日五月二年三十和曆
用科語國校學業實 日五月二年三十和曆



| | | |
|----------------|-------------------------|---------------------------|
| | | <p>文部省 教育司 力編</p> |
| <p>早稲田書局出版</p> | <p>純正 國語 讀本</p> | |

卷二 目次

| | | |
|---|-------------|----|
| 一 | 現つ神明治大帝 その一 | 一 |
| 二 | 現つ神明治大帝 その二 | 七 |
| 三 | 現つ神明治大帝 その三 | 一六 |
| 四 | 胸を刻む國旗の上下 | 三 |
| 五 | 日の丸の歌 | 二六 |
| 六 | 觀心寺 | 三 |
| 七 | 武藏野 | 三七 |

八 小さい旅人……………薄田泣菫……………四
 九 元七黒七鳥…………………………三
 一〇 文字……………木枝増一……………六
 一一 誠拙和尚……………窪田空穂……………七
 一二 無類の的…………………………七
 一三 仙人と石……………薄田泣菫……………七
 一四 歌がたり……………中村秋香……………八
 一五 蓑蟲に……………落合直文……………九
 一六 冬の雪國 その一…………………………九
 一七 冬の雪國 その二…………………………一〇

一八 勞苦と快樂……………小酒井不木(據)……………一〇
 一九 無名の指……………(鳩翁道話)……………一〇
 二〇 野口英世……………橘輝政……………一〇
 二一 我が幼時……………新井白石……………一〇
 二二 歩いた途……………河井醉茗……………一〇
 二三 紋所の話……………沼田頼輔(講演)……………一〇
 二四 美しき國民性……………芳賀矢一……………一〇
 二五 魚の骨……………細川潤次郎……………一〇
 二六 史傳を讀むべし……………大町桂月……………一〇
 二七 明治天皇御製頌歌……………八代六郎……………一〇



純正國語讀本 卷二

一 現つ神明治大帝 その一

明治天皇御代知ろしめすこと四十五年、其の間に於いて、我が國運は前古無比の興隆を見た。これ偏に廣大無邊なる陛下の御徳の賜物であるといはねばならぬ。

天皇の御徳は、實に日の如く、神の如く、光の如く、慈雨の如しと申し上げてもよい。天皇は幼くして御位に即かせられ、國難のつゞき起こる間に處して、連綿不斷に驚くべき努

天皇の御徳は、實に日の如く、神の如く、光の如く、慈雨の如しと申し上げてもよい。

連綿不斷の驚くべき努力の修養

民の父母てふ言をそのまゝ躬行して、億兆と苦樂を共にせさせられた。

萬機總攬

日月を理想として世界萬國に一視同仁の眡を向けさせられた。

力の修養を積ませられた。天津日嗣の御子たることを深く自覺して、圓滿なる帝王の御氣象を備へさせられた。民の父母てふ古言をそのまゝ躬行して、億兆と苦樂を共にせさせられた。古を存して新しきを立て、我が長を養つて萬國の長を兼ねさせようとつとめさせられた。萬機總攬の大御舵を慎重に無理なく操つて、國家國民を危険なく光明の理想地に導かうとつとめさせられた。日月を理想として世界萬國に一視同仁の眡を向けさせられた。その御慈しみはあまねく無心の生物にも及んだ。天皇御一生の御詠歌は十萬首に餘り、その一々が陛下の大御心そのまゝの現はれであるが、之れを拜しても、陛下の御盛徳が偲ばれる。

あさみどり澄みわたりたる大空の

ひろきをおのが心ともがな

さしのぼる朝日の如くさわやかに

もたまほしきは心なりけり

わが心いたらぬくまのなくもがな

このよを照らす月の如くに

いそのかみ古きためしをたづねつゝ

新しき世の事もさだめむ

たひらかに世は治まりて國民と

ともに楽しむ春ぞうれしき

花見つゝあそぶ春日におもふかな

いそのかみ古きためし

わが民草の上

九重のうち

おとらぬ國となすよしもがな

たがへず民のいとまなき世を
照るにつけ曇るにつけて思ふかな

わが民草の上はいかにと
民のため心のやすむときぞなき

身は九重のうちにありても
戦ひの場ばのおとづれいかにぞと

ねやにも入らず待ちにこそ待て
いたで負ふ人のみとりに心せよ

にはかに風の寒くなりぬる
よきを取り悪しきを捨て、外國に

おとらぬ國となすよしもがな

よもの海皆はらからと思ふ世に

など浪風のたち騒ぐらむ

天皇の數知れぬ偉大なる御行跡の中で、殊に難有きは民
草に對する厚き思ひやりの大御心であつた。陛下は侍臣
等が御避暑御避寒を御勸め申すのに對して、曾て御聽き入
れ遊ばされたことがない。そしてそれが兵士や農夫等の
勤勞に對する厚き御同情と、國費を節したまふ思召とによ
つたことは、

年々におもひやれども山水を

汲みて遊ばむ夏なかりけり

詠寄國祝歌
あらたまのとし
をむかへてよろ
づたみひとつこ
ころにくにいば
ふらし

詠寄國祝

歌

あらたまのとし
をむかへてよろ
づたみひとつこ
ころにくにいば
ふらし

明治天皇宸筆

の御製によつても拜察される。又崩御の少し前、東京の近
縣に於いて陸軍大演習を行ふ計畫があつて、陛下には玉體
御安泰のため、日々演習地から宮
城に還御あるやうに御願ひいた
したところ、いつまでも御許可が
なかつた。その中に期が迫つた
ので、取いそぎ御裁可を願ひ出で
ると、兵士どもは日々營舎には歸
らぬであらう、朕一人が宮城に歸
るのでは、統監の甲斐があるまい。」
と仰せられたので、恐懼して、演習地に御宿泊を願ふことに

努力勵精 御修
行

石黒忠恵
退役陸軍々醫總
監、子爵
新潟の人
昭和十六年歿
年九十七

改め、始めて御裁可が下つたといふ事である。

明治天皇は實に偉大なる帝王の天資を備へさせられた
上に、更に努力勵精の御修行を積ませられた名君であらせ
られた。吾等は其の御偉徳、御仁慈の最も纏まつて現はれ
た一節として、子爵石黒忠恵氏の謹話の一節を引くことに
する。

二 現つ神明治大帝 その二

石黒子爵はいはれる。

明治二十七八年戦役に際して、私は野戦衛生長官の役目

大帝に咫尺し奉るの光榮を得た
恐懼感激に堪へぬ。

區從する。

を承り、凡そ一箇年間、廣島の大本營に於いて、明治大帝に咫尺し奉るの光榮を得た。その一年の間、日々御側に奉伺して、拜見し、拜聞して、誠に恐懼感激に堪へなかつたことが澤山ある。

九月の十五日、廣島に御着きになると、私は停車場から扨從して、大本營へ行つて、二階に上つた。見ると、廊下の向うに扉ドがあつて、大帝はそこから入御になつたが、やがて御部屋の中なる玉座の御椅子に御掛けになつた。私は恭しく御前に出て、御機嫌を奉伺した。それから各室を一應檢分しようと思つて、案内者をつれて廻つて歩いた。

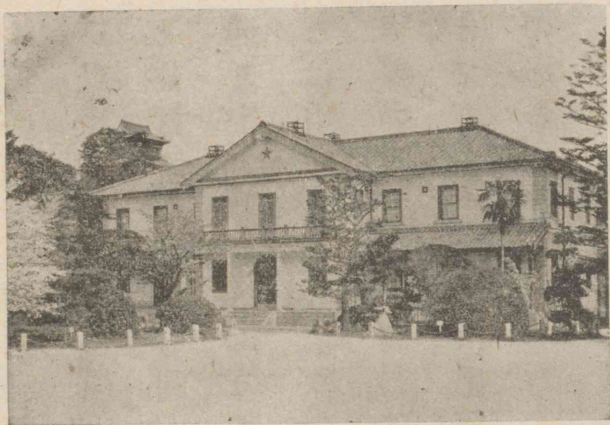
「御寢所は何處か。」

私はまづ尋ねた。案内者は答へた。

「御寢所と申して、別に御座いません。」

「どうして御寢みあそばすのか」と、重ねて尋ねると、

「御座所のうしろに立てゝある、あの御屏風の陰に御寢臺がありまして、御寢みになる時には、玉座を他ほかに移して、かほりに御寢臺を置き、御屏風で圍んで其處に御寢みを願ふことになつて居ります。」



廣 島 大 本 營

聞き糺して見る

と答へた。御座所も御寢所も一つだといふのである。私は驚いた。では御休息所は？」と尋ねると、それもないといふ。私は愈々恐懼に堪へなかつたので、よく聞き糺して見ると、先日、既に詳しい圖面を以て、宮内省を経て奉伺の上、右の通り定めたといふのである。いかに戦時の行在所であるとは申せ、畏くも至尊の御身を以てして、御寢所も御休息所もない、唯だ御一間だけの御座所とは、何といふ恐れ多いことであらう。私は感極まつて涙を呑むより外なかつたのである。

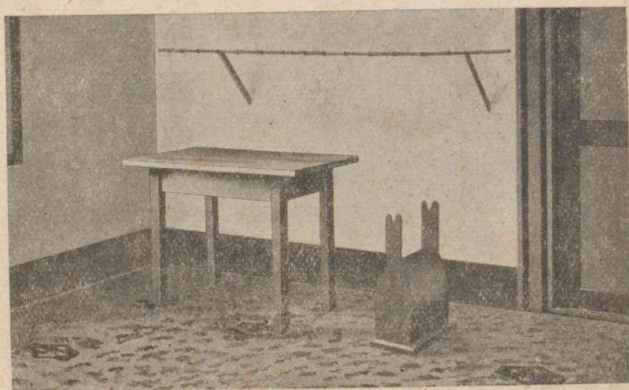
感極まつて涙を呑む。

此の御座所は斯様に手狭な上に、御室の備品としては、不
斷御掛けになる御椅子一つと、臣下に座を賜はる時の椅子

卓子一脚屏風二

が三つあり、御前には卓子一脚と御寢臺、御書物の御筆筒と御屏風が二双あるだけで、他には何の御裝飾も無いといふ、極めて簡略なものであつた。そこで宮内省の人が、これでは如何にも御窮屈で畏れ多いから、たまには御休息遊ばすために安樂椅子を御室に備へてはといふので、御意を伺ふと、大帝は、

「戦地には安樂椅子が備へ付けてあるか。」



廣島大本營の御調度御机御刀掛御衣箱

大御心の忝さを拜し奉る。

と仰せられた。

此の御一言に大御心の忝さを拜し奉つた宮内官は、ひたすら恐懼して、遂に安樂椅子さへも御室に入れることを差控へたのである。

大帝は二十七年の九月から翌年の四月まで、八ヶ月の長い間を此の御座所に過ぐさせられたのであるが、殊に酷暑の季節に暖爐の備付まで斥けさせられて、四十二疊敷の御室に僅か火鉢二つでお凌ぎ遊ばしたといふのは、何といふ畏れ多いことであらう。これは畢竟、大本營の御座所に在らせられても、テントやバラックの内にあつて、寒氣と戦ひつゝある將卒と苦しみを同じうし給ひ、又一般國民と辛苦

これは畢竟、國民と辛苦を分かたせらるゝ大御

心に外ならなかつた。

を分かつたせらるゝ大御心に外ならなかつたのである。

大帝は非常に御嚴格にあらせられたけれども、その間にまた何ともいへぬ御温情があらせられた。その年の十月二十五日のことである。私は戦地を一巡して來いと仰せを蒙り、直ちに廣島を出發して戦地に赴き、各地を視察して、十一月二十四日の夜、廣島に歸つて來た。さうして翌日の御軍議の際、視察先の將卒の健康状態、士氣、氣候、物資の過不足、運輸の便否等について詳細に奏上したが、奏上し終はると、まづ第一に御下問になつたのは、朝鮮及び滿洲に出て居る軍隊の糧食に就いてであつた。

「飯は朝鮮米か、日本米か、それとも支那米か。」

かういふ御尋ねに對し奉つて苟もあやふやな事は申上げられぬ。記憶して居る事でも、尙ほ念の爲めに調査した上でなくてはお答へができぬ。それで、私は一々手帳を見て、たとへば、

「平壤に居ります兵は、朝鮮米を食べて居ります。義州に居る兵は、朝鮮米と日本米とを交ぜて食べて居ります。」といふ風に、審かに言上した。さうすると、

「朝鮮米には砂が澤山混つて居ると言ふことを聞いて居るが、其の朝鮮米を食べて居る兵が、齒を痛めるとか、腸胃を壊すとかいふことはないか。」

重ねての御下問である。

と、重ねての御下問である。私は實に恐れ入つた。そして

かく御答へ申上げた。

「朝鮮米を食べては居りますが、其の飯には砂が混つて居りませぬ。凡そ朝鮮米に砂が多く混つて居りますのは、朝鮮では稻を刈ると、陸田ならば直ぐに地上で乾かし、水田でも乾田の上に乾かして置いて收穫を致しますから、其の間に砂が多く混るので御座います。併し朝鮮で飯を炊きますには、内地の如き米磨桶を用ゐるずに、くり鉢で、米を磨ぎます。其のくり鉢の底には、轆轤で渦卷が彫付けてありますので、それに米を入れ、水を入れて磨ぎますと、砂は重いので、皆渦卷の中に入つて了ひますから自然に除かれます。随つて飯には砂が混りません。どうぞ

御安心遊ばすやうに願ひ上げます。」
と申上げて、彼地から特に持ち歸つた砂瀘すなごしの渦卷を鞆か
ら出して、御覽に入れた處、陛下も御安堵遊ばしたか、大層御
機嫌麗しく拜せられた。

三 現つ神明治大帝 その三

これも同じく其の戦地巡廻の折の話であるが、私は十一
月二日に朝鮮の漁隱島を出帆して、翌日兵站司令部のある
元浦に着いた。其處の司令官は陸軍少佐山縣俊信君であ
つた。私は其處の巡視を終へて、すぐさま出發しようとする

ると、山縣司令官が引きとめて云ふのに、

「暫らく御待ちを願はれますまいか。實は現在此處に、將
校、下士卒から軍夫まで加へて八十三人居りますが、正午
にはそれらが全部山の上に登つて、盃を舉げて天長の佳
節を祝し、陛下の萬歳を唱へたいと存じて居たところで
あります。そこへ閣下の御來臨は願つてもない幸です
が、どうか一つ音頭を取つて戴きたい。」

といふのである。私も大いに喜んで、

「それは結構な事ぢや。此方から願つても致したい位で、
と答へた。それから十一時に、司令官と一緒に山の上に登
つて見ると、兵站部で用意した酒が一樽、鏡を抜いてある。」

天長の佳節
明治天皇の御誕
生日、十一月三
日。

音頭を取る。

酒が一樽、鏡を
抜いてある。

はたと困つた。

屈竟の盃。

又其の傍らには焼鯛を裂いたのが、箆に堆く盛つてあるが、肝腎な盃がない。司令官は、之れを見てはたと困つた。私も氣の毒に思つてゐると、司令官が俄に手を拍つて喜んで、「いや天佑々々。濱邊へ行くと牡蠣の貝が澤山ある。」閣下、屈竟の盃が思ひつきました。」といつて、直ぐに従卒をやつて蠣殻を拾はせた。暫らく経つと二人の従卒が箆に一杯づつ、きれいに洗つた蠣殻を持つて來た。

その時はもう十二時に近くなつたので一同山上に整列して居ると、麓から一人の軍夫が、「お待ち下さい。お待ち下さい。」

と云つて駆け上つて來たが、見れば手に日の丸の旗を持つてゐる。一同の視線は悉くその軍夫に集まつた。どうしたのかと怪しんで居ると、彼れはやがて私の前に立ち、其の日の丸の紙旗を差出して、

「閣下、これで音頭を取つて下さい。」

と言つた。私は直ぐにそれを受取つて、高く捧げつゝ、日本の方に向つて、恭しく「天皇陛下萬歳」を三唱した。一同はこれに和した。それから皆飲め〜と言つて、牡蠣の貝で盛んに祝盃を舉げた。

其の時振つた旗を、あとになつてよく見ると、驚くではないか、半紙に、梅酢で紅く日の丸が染めてあつて、ところ〜

にはまだ紫蘇の葉が附いてゐる。それを飯粒で細い竹に貼りつけたのである。私は其の牡蠣の貝と梅酢の旗とを鞆の中に入れて持ち歸つた。

さうして大本營に於いて陛下に此の事を奏上して、その二品を取出して御覽に入れた。すると、大帝はぢつとそれを御覽になつていらせられたが、そのうちに畏くも御眼に涙を御催しになつた。それを拜して、御前に畏つて居た私は勿論、川上も、寺内も、野田も、岡澤も、皆感極まつて泣いた。梅酢で旗を染めて聖壽を千里の外で祝し奉るといふ民があるのは、之れを御覽になつて御涙を催し給ふ君がおはすからだ、私はその刹那に、ひしと胸を打たれたのである。

川上操六

當時參謀次長兼

兵站總監

寺内正毅

當時野戰運輸通

信長官

野田裕通

當時野戰監督長

官

岡澤精

當時侍從武官

ひしと胸を打た

れた。

それから、まだ恐れ入つた事がある。ちやうど是等の事を奏上し終はつた時である。陛下は突然、

「其の司令官の山縣といふのは、あの西南の役の山縣か。」と御尋ねになつた。私は、

「いかにも仰せの如く、西南の役に殊勳のありました山縣俊信で御座います。」

と御答へ申上げた。是れは山縣があつた戦役に殊勳があつたので、特に勳四等に叙せられたのを御記憶あらせられての仰せである。西南の役以來十八年、當人は既に退役して居たのを、この戦争で召集されて、兵站部司令官となつて出征したのであるが、大帝は今や卒然として、其れは西南の役

殊勳があつた。

俊信

山縣

何といふ有難い
畏れ多い事であ
らう。

の山縣か。」と御下問あらせられたのである。恐れ入ると共に驚き入らざるを得ないではないか。幾ら軍功があつたにせよ、一大尉の名を十八年間も御記憶になつて居らせられるといふ事は、何といふ有難い畏れ多い事であらう。其の晩私は山縣に長い手紙を書いて、此の君恩の忝さをつたへた……

これが石黒子爵謹話の大要である。吾々は大帝の御君徳、御仁慈に對して、實に言ふべき言葉を知らぬ。

四 胸を刻む國旗の上下

市井無頼の股。
韓信
漢の高祖の臣
淮陰の人、後淮
陰侯に貶せら
れ、呂后の爲め
に殺さる。

雲居禪師
元和年間の奇僧
土佐の人
攝津國勝尾寺に
住す。後松島瑞
巖寺に住し、伊
達政宗に優遇せ
らる。
熱涙を揮ひ、熱
鐵を呑む心地。

思出は床しいものである。西洋の語に「苦しい事も思出となれば後光を放つて現はれる」と云つて居るが、誠に思出の樂しさは、快樂や成功のそれ（民）に限るのではない。悲痛、悔恨、失敗の思出の方が、或は快樂、成功以上の深い味ひを以て再現するかも知れぬ。市井無頼の股をくゞつた思出が、楚王となつた後の韓信の心に現はれた時、伊達政宗に額を蹴られた下駄の思出が、禪師となつた後の雲居の心に現はれた時、それは實に言語道斷の意味深き感じを伴つたであらう。

國家に於いても同じ事である。曾ては熱涙を揮ひ熱鐵を呑む心地して、辛うじて忍んだ經驗が、臥薪嘗膽の長い辛

臥薪嘗膽の長い
辛苦によつて偉
大な成功勝利を
贏ち得た。

無上甚深の感謝
をさ、ける。

苦によつて偉大な成功勝利を贏ち得た後に、振り返つて想
ひ起こさるゝならば、それは實に國民に取つて最大最高の
愉快であらねばならぬ。そして若し世に斯様な愉快を経
験し得たる國民があるならば、其の國民は、天に謝し、幸運を
悦ぶと共に、犠牲となつた先輩に對して無上甚深の感謝を
さ、げねばならぬであらう。

市島春城

早稻田大學名譽
理事

名は謙吉
新潟の人
萬延元年生

千載の遺憾

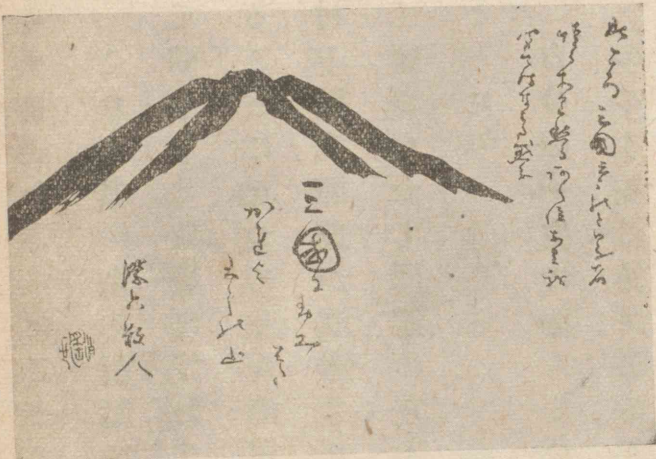
左に記すは市島春城氏の直話である。

二十七八年戦役の最後に、謂はゆる三國干渉によつて遼
東半島を還附することになつたのは、我が國民にとつてま
ことに千載の遺憾であつた。當時、明治大帝が此の不慮の

勝海舟

明治維新の志士
初め從五位下安
房守、後に樞密
顧問官、伯爵
名は麟太郎、後
安芳と稱す
明治三十二年歿
年七十七

此ころ三國云々の
といふ者憤るあり
愁るあり泣くあり
我聞てはなはだ感
ふ。
三國にふみはだ
かれよふしの山
濠六數人



畫刺諷の舟海勝

大事件について、いかに大御心を悩ましたまうたかは、拜察
するだに畏れ多いきはみである。勝海舟翁は「三國に踏み
はだかれよ富士の山」と詠じ、そ
れが一筆がきの富岳の畫に書
き添へられて、此の痛恨事の決
定した翌日の新聞に掲げられ
た。新聞雜誌は沈痛の筆を揮
つて一齊に、此の拂ひのけ得ぬ
外壓におさへつけられた國民
の鬱懷を代辯した。當時の我
が國民は、心こそ異なれ、一人殘

熱涙を呑む。

村上敬次郎
廣島縣の人
昭和四年歿

田原榮
理學者、語學者
元早稻田大學高
等豫科長
廣島縣の人
大正六年歿

らず熱涙を呑んだことであらう。

これも其の時の挿話の一つである。還附の事がきまつて間もなく、旅順に於いて遼東半島還附授受の式が行はれることになつて、我が海軍からは後の男爵、當時の經理局長、村上敬次郎氏が派遣された。その村上氏が役目をすまして歸つてから、同郷の友人なる田原榮氏に語られたといふことに、

「自分の一生に、あんなつらい思ひをしたことがない。あのやうなお使は、とても二度とは勤められぬ。還附の式としては、旅順の埠頭に今の今まで樹てゝあつた日章旗を卸して、その代はりに清國の黃龍旗を揚げるのだが、そ

實にやり切れなかつた。

一寸だめしのなぶり殺し。

腸九廻す。

悽愴の氣を添へる。

胸の張り裂けるやうな心地。

れがずん／＼と一思ひに下げ、一思ひに上げるのなら、何でもないが、揚げ卸しに約四十分もかゝるのだからね。それは實にやり切れなかつたよ。あの時の感じは、マア一寸だめしのなぶり殺しとでも言はうか、腸九廻すなどいふのはまづあんな事かと思つた。それに此の光景に一段悽愴の氣を添へたのは海軍の軍樂隊が哀傷の譜を奏した事で、それが、二つの國旗の人をぢらすやうな上り下りと調子を合はせて、物悲しい空氣を漂はせつゝ、四分間もつゞくのだから、恥かしさ、悔しき、腹立たしさで、實に胸の張り裂けるやうな心地がした。」
と云はれたといふことである。さうもあらう。吾々は其

先輩諸子と
…國民と

の折の村上氏の心地がよく解ると共に、今日から振返つて見ると、何とも言はれぬ痛快な心地がする。そして同時に、當時事に當たつた先輩諸氏と、長く隱忍の努力を續けた國民とに對して、限りなき感謝を捧げたくなるのである。

五日の丸の歌

西條 八十

西條八十
詩人 早稻田大
學教授 明治二
十五年東京市に
生れた

赤は勇氣に燃ゆる色。
白は正義に生くる色。
二つの色に染めわけし
我が日の丸の尊さよ。

たふとさ

あわ

赤は朝日の昇る色。
白は泡だつ海の色。
遠く世界を照すなる
國威を語る旗の色。

あゝこの旗の行く所、
敵はなびきぬ草のごと。
あゝこの旗のもとにして、
勇士は死にぬほゝるみて。

ほゝるみて

はえ
をどる

つねに進みて搖がざる
歴史光榮ある日の本を、
國旗のかげに想ふ時、
熱き血潮はをどるかな。

あぶく

天は晴れたり今日もまた、
門邊に仰ぐ我が國旗。
正大の氣を放ちつゝ
のぼる朝日の美しさ。

〔國民詩集〕

笹川臨風

名は種郎 東京
市の人 明治三
年生 文學博士

六 觀 心 寺

笹 川 臨 風

觀心寺

大阪府南河内郡
にある、古義眞
言宗高野派に屬
する寺、楠氏の
菩提寺。
五年ほど前
大正三年頃。

蹟(跡)績
浸(侵)
蕭(蕭)
覺(覺)えた

もう彼是五年ほど前になるが、南河内を巡遊して觀心寺を訪れたのは、眞夏の暑い日盛りであつた。草も木も土も蒸すやうにいきれて、眩ゆい日光はかんくと照りつける。深くもない山であるから、冷たい山嵐の氣はそよとも動かなくつた。其の後再び觀心寺に吉野朝の遺蹟を吊つた時は、秋雨がしとく降る夕暮近くであつた。紅葉にはまだ早かつたが、山には秋の氣が浸み渡り、満目蕭條として、此の寺にふさはしく覺えた。

早朝雨を冒して、自動車で、和歌の浦、紀三井寺を廻つて、和

くらゐ。

著(着)

吉野朝の遺香が
雨の庫の中に芳
つゝ。

歌山驛から高野鐵道に乗る。雨は絶間もなく降つてゐたが、何、此のくらゐの雨はと、長野で下りて車に乗つて觀心寺まで山路を辿る。

三十町許りを搖られながら觀心寺に著いた。若い坊さんを案内に寶庫を拜見する。吉野朝の遺香が雨の庫の中に芳しい。祕佛の御本尊を拜するため、庫を出て石段をのぼる。此の石段から御堂を眺めると、何となくいゝ心持だ。御堂には御燈がついて、はや御經が始る。護摩壇の前に畏つて御經を聞いてゐると、全く浮世を離れた心持がする。外には秋雨が降つて、軒の玉水が絶間なくおとづれる。御堂を表へ出ると、雨は小降りとなつたが、もう秋の陽の、

漂(う)て(ひ)

縁、椽、椽、縁、
碌、碌

貞永二年
一八九二

近江

滋賀縣

丹波

京都府

防いだ

殊に雨の日とて暮れ易く、夕暮の色は遠近に漂うてゐる。御堂の縁に立つてゐる若い坊さんと、私たち三人との外には人影もない。鎌倉時代の遺物として貞永二年の銘ある鐵燈籠は、雨の中に淋しく立つてゐる。春風秋雨七百年、彼は常にかくして立つてゐるのである。

私は暫し過去の觀察に耽らざるを得ない。

幕府は、大塔宮を弑し奉る者には、近江の國麻田の庄を與へ、楠公を殺す者には丹波の國船井の庄を與へんと懸賞したのを見て、其の慌て加減が思はれるのである。吉野陥り、恢復せられた赤坂もまた落城するに及びて、千早の險は天下の大軍を物の數とせず、防いだ唯一の城であつた。

孤一狐、孤、狐

楠公の智謀勇略百出して、千早の牢として動かすべからざるを見て取つてから、所在に勤王の義旗が翻つた。隱岐に新島守とならせられた主上が孤島をお遁れ出でになつて、遂に京都の恢復となり、鎌倉の覆滅となり、建武中興の大業はめでたくも建てられたのである。

賊魁は一度筑紫に落ち延びたが、再び大舉して東上するに及び、楠公は叡山行幸の奇策を奏したが容れられなかつた。是に於て楠公は心潜に決する所があつた。「正成既に討死すと聞きなば、天下は必ず將軍の代になりぬと心得べし。さりながら、一旦の身命を助らんがために、多年の忠烈を失ひて降人に出づる事あるべからず。一族、若黨の一人

潛潜
決決
聞きなば
成りぬ

邊(辺)

養由

楚の人、弓術の達人。

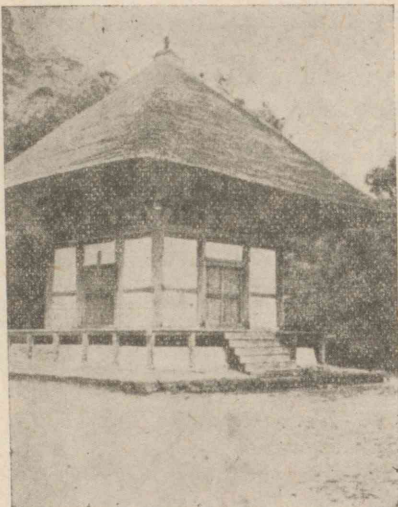
紀信

漢の高祖の臣、主君の命に代つた忠義の人。

是ぞ...ずる

命を養由が矢先にかけて、義を紀信が忠に比すべし。

も死に残りてあらん程は、金剛山の邊に引籠つて、敵寄せ來らば、命を養由が矢先にかけて義を紀信が忠に比すべし。



塔寶多の寺心觀

是ぞ汝が第一の孝ならんずる。とその子に遺訓して湊川に出陣した。今觀心寺に建立しかけて出陣したと傳へられる多寶塔の第一層のみ、藁葺の儘現存してゐるが、

事實は上層が雷火に焼けたのである。

楠公の潔き最期は、日本國民のあらん限り、國民の血を沸かせ其の精神を鼓舞するものである。味方は固より敵さ

敵さへ

へも之を惜しまぬはなかつた。楠公の首級は足利方から其の故里へ送られた。觀心寺の本願堂の傍なる首塚は、此の誠忠無二の偉人の首級を葬つた處であると傳へられてゐる。楠木氏と關係の深かつた當寺に之を埋めたといふのは、當然あるべき事である。

事は過ぎ、人は去つたが、遺芳今にかぐはしい忠臣のことを思つて、觀心寺の御堂の下に佇んでゐると、私の胸は躍つて血が血管の中に沸くやうに覺える。松杉暗き石磴を拾つて、檜尾御陵に參拜し、吉野朝の英邁なる天子が當時の御心情を推し測り奉ると、思はず暗涙を吞まざるを得ない。顧みると雨雲收り、夕暮の空は紅う映えて、雨の雫が老杉の

磴—燈、燈、澄、檜尾御陵
後村上天皇の御陵、觀心寺後山にある。
當時の御心情
後村上天皇は正平十四年(一二七三)乙賊軍を避けさせられ觀心寺に行幸、寺内の總持院を以て行宮と定められた。
紅う。

梢からはらく／＼とこぼれた。

〔古蹟めぐり〕

七 武藏野

國 木 田 獨 歩

武藏野に散歩する人は、路に迷ふことを苦にしてはならない。どの路でも足の向く方へ行けば、必ず其處に見るべく、聞くべく、感ずべき獲物がある。武藏野の美は、たゞ其の縦横に通ずる數千條の路を、當てもなく歩くことに由つて始めて獲られる。春、夏、秋、冬、朝、晝、夕、夜、月にも、雪にも、風にも、霧にも、霜にも、雨にも、時雨にも、たゞ此の路をぶらく／＼歩いて、思ひつき次第に右し左すれば、隨處に吾等を満足させる

國木田獨歩
明治の小説家
名は哲夫
千葉縣の人
明治四十二年歿
年三十八

林と野とが斯くも能く入り亂れて、生活と自然とが斯の様に密接して居る處が何處にあるか。



國木田獨歩

ものがある。これが實に武藏野第一の特色だらうと、自分
はしみぐ、感じてゐる。武藏野を除いて、日本にこんな處
が何處にあるか。北海道の原野には無論のこと、那
須野にもない。其の外何處にあるか。林と野とが
斯くも能く入り亂れて、生活と自然とが斯の様に密接して
居る處が何處にあるか。武藏野に斯かる特殊の路のある
のは、實に此の故である。
されば君若し、一つのこぢ小徑を行き、忽ち三條に分かるゝ處
に出たら、困るに及ばない。君の杖を立て、倒れた方に行

君の杖を立て、倒れた方に行き給へ。

頭の上の梢で小鳥が鳴いて居たら、君の幸福である。
見わたしの広い野が開ける。
尾花の末が日に光つてゐる。

き給へ。或は其の路が君を小さな林に導く。林の中ほど
に到つて又二つに分かれたら、其の小なる路を選んで見給
へ。或は其の路が君を妙な處に導く。其處は林の奥の古
い墓地で、苔むす墓が四つ五つ並んで、其の前に少しばかり
の空地があつて、其の横の方に女郎花などの咲いて居るこ
ともあらう。頭の上の梢で小鳥が鳴いて居たら、君の幸福
である。すぐ引き返して左の路を進んで見給へ。忽ち林
が盡きて、君の前に見わたしの広い野が開ける。足元から
少しだらく、下りになり、萱が一面に生えて、尾花の末が日
に光つて居る。萱原の先が畑で、畑の先に脊の低い林が一
叢繁り、其の林の上に遠い杉の小杜が見え、地平線の上に淡

小春の日の光が
長閑に照り、小
氣味よい風がそ
よよと吹く。

右に行けば林、
左に行けば坂。
君は必ず坂を登
るだらう。

淡しい雲が集まつて居て、雲の色にまがひさうな連山が其
の間に少しづつ見える。小春の日の光が長閑に照り、小氣
味よい風がそよよと吹く。若し萱原の方へ下りてゆく
としたら、今まで見えた廣い景色が悉く隠れてしまつて、小
さな谷の底に出るだらう。思ひがけなく細長い池が、萱原
と林との間に隠れて居たのを發見する。水は清く澄んで、
大空を横ぎる白雲の斷片を鮮かに映してゐる。水の邊に
は枯蘆が少しばかり生えてゐる。此の池の邊の徑を暫ら
く行くと又二つに分かれる。右に行けば林、左に行けば坂、
君は必ず坂を登るだらう。兎角武藏野を散歩するのに、高
い處高い處と選びたくなるのは、何とかして廣い眺望を求

めるからで、それで其の
望みは容易に達せられ
ない。見下すやうな眺
望は決して出來ない。
それは初めから諦めた
がい。

若し君、何かの必要で
路を尋ねたく思はゞ、畑
の眞中に居る農夫に聞
き給へ。農夫が四十以
上の人であつたら、大聲



武藏野の農家

若し若者であつたら、帽を取つて慇懃に問ひ給へ。鷹揚に教へてくれるだらう。怒つてはならない、これが東京近在の若者の癖であるから。

をあげて尋ねて見給へ。驚いて此方を向き、大聲で教へてくれるだらう。若し少女であつたら、近づいて小聲で聞き給へ。若し若者であつたら、帽を取つて慇懃に問ひ給へ。鷹揚に教へてくれるだらう。怒つてはならない、これが東京近在の若者の癖であるから。教へられた方の路は、餘りに小さくて少し變だと思つても、其の通りに行き給へ。突然農家の庭先に出るだらう。果たして變だと驚いてはいけぬ。其の時農家で尋ねて見給へ。門を出るとすぐ往來ですよと、すげなく答へるだらう。農家の門を外に出て見ると、果たして見覚えある往來。なる

名詞十

五時
夜三時

折々落葉の音が聞こえる許り、四邊はしんとして如何にも淋しい。

梢の先は針の如く細く蒼空を指してゐる。

程これが近路だなど、思はず微笑をもらす。其の時始めて教へてくれた人の有難さがわかるだらう。眞直な路で兩側共十分に黄葉した林が四五町も續く處に出ることがある。此の路を獨り靜かに歩む事がどんなに樂しからう。右側の林の頂には夕照が鮮かに輝いて居る。折々落葉の音が聞こえる許り、四邊はしんとして如何にも淋しい。前にも後ろにも人影見えず、誰れにも遇はず。若しそれが木葉の落ち盡くした頃ならば、路は落葉に埋もれて、一足毎にがさくと音がする。林は奥まで見すかさず、梢の先は針の如く細く蒼空を指してゐる。尙更人に遇はない。愈淋しい。落葉を踏む自分の足音ばかり高く、時

時慌だしく飛び去る山鳩の羽音に驚かされるばかり。

同じ路を引きかへして歸るは愚である。迷つたところが今の武藏野に過ぎない。まさかに行き暮れて困ることもあるまい。歸りもやはり凡その方角をきめて、別な路を當てもなく歩くが妙。さうすると、思はず落日の美觀を得ることがある。日は富士の背に落ちんとして未だ全く落ちず、富士の中腹に群がる雲は黄金色に染まつて、見るが中に様々の形に變ずる。連山の頂は、白銀の鎖の様な雪が次第に遠く北に走つて、終りは暗澹たる雲のうちに没してしまふ。

日が落ちる。野は風が強く吹く。林は鳴る。武藏野は

まさかに行き暮れて困ることもあるまい。歸りもやはり凡その方角をきめて別な路を當てもなく歩くが妙。

日が落ちる。野は風が強く吹く。林は鳴る。

武藏野は暮れんとする。寒さが身に沁む。其の時は路を急ぎ給へ。

風が今にも梢から月を吹き落しさうである。

蕪村の句

暮れんとする。寒さが身に沁む。其の時は路を急ぎ給へ。顧みて思はず新月が枯林の梢の横に寒い光を放つてゐるのを見る。風が今にも梢から月を吹き落しさうである。突然又野に出る。君は其の時、
山は暮れ野は黄昏の薄かな
の名句を思ひだすだらう。

〔武藏野〕

八 小さい旅人

薄田 泣菫

薄田泣菫
名は淳介 詩人
隨筆家 岡山縣
の人
明治十年生

私たちが七つ八つの頃には、そろそろ秋が更けて來ると、晴れきつた空を毎日のやうに雁が渡つた。私たちはそれを見かけると、吹きさらしの野路に立つて、空の一方を振仰ぎながら、

雁よ棹になれ。

棹になつたら鉤になれ。

と、その長い行列が漸次に雲の中ににじみこんでしまふまで、聲をからして叫んだものだ。が、何時の間にか雁も少くなつて、今では晝間その長い列が空を渡る事は、よく／＼人

鉤(釣)
にじむ

氣遠い野原かどこかでないと、めつたに見られなくなつた。

その頃はまだ後の丘へ行つて見ると、葉の落ちかゝつた



(筆郵青田前)

雑木林に、小鳥が澤山來てゐたものだ。小鳥と言ふと、私は海などを越えて來るあの小さい旅人のあわたましい旅を考へて、何時も言はうやうのない寂しい旅心地を覺える。まづ百舌が來る。秋の彼岸が過ぎて、そろ／＼日影が黄色がかつて

越え。
あわたましい
言はうやうのな
い。
覺える。

來よう

來ようといふ頃、私たちはどうかすると、暖かい日の午過、こらの木立で甲高い鋭いその聲を聞く事がある。「あゝ、も

まじつて

う秋だな。」と思はず振返つて見ると、矮ちがひ小な櫟くわくにまじつて、
ずばぬけて背の高い楡いもぎの木に百舌ももぢが一羽とまつて、黄色い
夕陽を受けて羽が金のやうにきら／＼してゐるのが見え
る。私達はその瞬間、言はうやうのない強い、健かな氣持が
胸に流れるのを覺える。

次にはひたきが来る。山家の午過、だるさうなきり／＼
すの聲も何時の間にか止んで、枯葉一つ寝返りを打つ音ま
でがはつきりと耳に入る、静けさの底に、どこやらやつれた
人の溜息とでも言つたやうな微かな聲がもれて来て、何の
音ともわからない。すると、樹蔭の萑畑わづらかどこかで、餘念も
なくせつせと仕事に精出してゐた農夫が、ひよいと顔を舉

枯葉一つ寝返り
を打つ音までが
はつきりと耳に
入る静けさの底
に、どこやらや
つれた人の溜息
とでも言つたや
うな微かな聲
……

悲哀を抱いてゐる人のやうに

げる拍子に、すぐ鼻先の小枝から、枯葉のやうに小鳥がつい
と身をそらして、逃げて行つて
しまふ。それがひたきだ。
ひたきと言つたら、まるで悲
哀を抱いてゐる人のやうに大
抵は連に離れて、たゞ獨りで出
て来る。そしてそこらの小枝
にとまるなり、何か眼に見えぬ
昔馴染でも招くやうに、ひよく
り、ひよくりと軽いお辭儀をして、さゝやくやうな聲で歌ひ
出す。私はそれを見ると、人の爲、世の爲と言つたやうなわ



(筆畝十木荒)

雀 十 四

まるで時雨れでもする様に細かい羽音がさつと空を掠めて聞える。

かうした

けでなく、自分一人の爲に歌つて、それで満足してゐる人たちを思ひ出さずにはゐられない。

ひたきが来て、ものの十日と経たぬ間に、四十雀が来る。

この鳥はひたきと違つて、十羽も二十羽も群を組んで来る。

山から里へ移るをりなどには、まるで時雨れでもする様に、

細かい羽音がさつと空を掠めて聞える。そしてそこらの

木立におりるなり、眩しい程すばしこく、雀のたごなどを啄

き廻しながら、鼠色の背をそらし、柔かみのある圓い胸を見

せて、透徹つた銀の鈴を振るやうな聲で、早口にしゃべり續

ける。で、かうした大層な群の中には、きつとまだ羽の伸び

きらない灰色の産毛そのまゝの雛兒がまじつてゐて、どう

そこはまた馴れたもので。

かすると高い枝にとまり損ねて、もんどりうつて宙に返ることもあるが、そこはまた馴れたもので、いきなりひよいと下枝につかまつて、ませた身振で、樹肌のひびを啄いたりする。まるで山家そだちのすばしこい、きさくな魂そのものを見るやうな氣持がする。

小雪がちらつく頃になると、みそさびい^{みそさびい}が来る。これはひたきと同じやうに、大抵獨法師で、それもこつそりと附近を忍ぶやうにして来る。冬の初の午過、山近い田舎の小家で、爺さんは炬燵にもぐりこんで、こくりこくりと居眠をする。その傍で婆さんはせつせと絲車を繰つてゐる。煤けた障子に、檐につるした干菜の影が見すばらしく映つて、時

聴取れようはず
がない
さうかう

をりちつぽけな小鳥の影がちらついたりする。どうかして
て糸目が切れて、睡さうな錘の音がぼつたり止むと、ここ
そと掛菜をむしる音がするが、老人の耳にそんな音の聴取
れようはずがない。婆さんは俯いたまゝ、また糸を紡ぎに
かゝる。さうかうする間に、鳥は舌打をするやうな聲を立
てながら、ひよいひよいと小刻みに籬を傳はつて、隣から隣
へと、狭苦しいもの蔭を出たりはいつたりして移つて行く
のだ。それがみそさざいである。
みそさざいと後先になつて頬白が来る。冷い雨のびし
よ／＼と降る中を、獨者の頬白が灰色の胸までぐしよぬれ
になつて、しよんぼりとそこらの木にとまつてゐるのを見

ると、私の國でこの鳥の鳴聲を解いて、

一筆啓上つかまつる。

子供泣かすな火の用心。

今度の便りに金十兩。

やりたいけれど、一文もござなく候。

と言傳へるのを思ひ出して、しみ／＼世渡のむつかしさと、
旅心の寂しさを思はずにはゐられない。

後の雑木林にこんな小鳥が来る頃になると、野にはもう
そろ／＼鶉が來、鶉が來る。

鳴一鶉

〔畿内行脚〕

九 元七黒七鳥

秋の入日が茜色に山を染める。

會津地方の或る山里の話である。秋の入日が茜色に山を染める時分に、林の中では片羽が白く片羽の黒い翼を持った鳥が、淋しい聲で鳴くといふ。土地の人々は、之れを元七黒七鳥と呼んで居るが、この不思議な翼と名前とを持った鳥の由來について、哀れにもまた面白い物語がある。

「愚」と云ふ徳。盈つる月、虧くる月に日並を知つた頃の話。

それは遠い昔の傳説である。人々がまた「愚」といふ徳を有ち、鶏の聲に目をさまして、盈つる月、虧くる月に日並を知つた頃の話である。近い世の事ではない。其の頃、此の山里に獵を渡世とする一人の男が居て、其の子に元七、黒七といふ兄弟があつた。二人の母は弟の黒七

めつきりと衰へて、頬に勇猛の血潮を見ぬやうになつた。

がまだ幼い時分に、此の世を去つた。

酒に映る吾が顔に老の影さへ見出だしては、徒らに淋しさを増すばかりである。

元七黒七の父は其の後めつきりと衰へて、頬に勇猛の血潮を見ぬやうになつた。日頃手馴れた半弓も、今は空しく壁にかゝつて埃の積もるに任せてある。無論氣紛れに、時折弦を鳴らして見ることはあるけれども、もう昔のやうな興に乗ることがない。獨酌の盃を傾けることもあるが、酒に映る吾が顔に老の影さへ見出だしては、徒らに寂しさを増すばかりである。妻には先立たれ、獵には興を失ひ、酒にさへ寂し味を感じずるやうになつては、何を樂しみに此の世に存命へよう。彼れは惘然として力なく其の日々を暮らした。

彼れはあらゆる慰安と希望とを其の二人の子にかけて、はかなき世の憂節にも深き興味を感ずる様になつた。寂しい晩年に一つの色彩を添へた。

一しきり彼れを襲うた寂しさは我が子の愛によつて拭ひ去られた。

しかし、それは暫らくの間であつた。やがて、彼れの眼には二人の子供の成長して行く様子が見え出した。そして彼れはあらゆる慰安と希望とを其の二人の子にかけて、はかなき世の憂節にも深き興味を感ずるやうになつた。げに寂しい此の父の晩年に一つの色彩を添へたのは、其の子供であつた。一にも子、二にも子、天にも子、地にも子、彼れはもう其の他を知らないやうになつた。かくして一しきり彼れを襲うた寂しさは、我が子の愛によつて拭ひ去られた。磐梯おろしの吹き荒む寒い夜でも、三人が楽しく食事する爐のほとりには、紅の檜火が陽氣に燃えて、美しく暖かであつた。

かくて幾年かを過ぎて、或る年の秋である。時は獵の季節に入つて、弦音が日毎にあちこちの山に響いた。年こそ若けれ、獵人の血を受けた二人が、どうして家になつとして居られよう。

彼等は父を促し打ちつれて山に入つた。二人は興に乗つて奥へくと這入つて行く。父は遂に二人にはぐれた。聲を限りに谷々峰々を呼びくらしただけれども答がない。子にはぐれた父は淋しき夕日の影をあびて、ぼんやりと我が家に歸つて來た。見れば、我れより先きに人の歸つた様子がない。しんとした静けさは忽ち父の胸に絶望の暗示を與へた。

父は遂に二人にはぐれた。聲を限りに呼びくらしただけれども答がない。淋しき夕日の影をあびて歸つて來た。しんとした静けさは父の胸に絶望の暗示を與へた。

答を豫期しなかつた呼び聲は、無論空しく静かな空氣を驚かしただけである。

彼れは鼓動する心臓を抑へつゝ、コトリとも音のしない室に向つて、慌たゞしく子の名を呼んだ。答を豫期しなかつた呼聲は、無論空しく静かな空氣を驚かしただけである。父の胸は益々穩かてなくなつた。彼れは上り框に腰をかけて黒い足袋を片足脱ぎかけたが、一寸ためらつて、すぐに山の方に引返した。而して廣い山の中を當てもなく歩きながら、わが子の名を呼んだ。

「元七！ 黒七！ 元七黒七！ 元七黒七！」

彼れは身も世もなく叫びに叫んだ。而して身にふりかかる危険をさへ忘れて斷崖荆棘の嫌ひなく、何處までも深入りした。

身も世もなく叫びに叫んだ。

「元七！ 黒七！ 元七黒七！」

血に叫ぶ男叫びは、深山の寂寞を破つて終夜響いたであらう。

血に叫ぶ男叫びは、深山の寂寞を破つて終夜響いたであらう。

その翌朝であつた。始めて降りた霜は、樺の木の下に、片足に黒い足袋をはいて倒れてゐる老人の死骸を、白く悲しく染めてゐた。そして傍らの木の枝には、片羽が黒く片羽の白い翼を持つた小鳥が、バタ／＼ときびしく羽搏きしながら、痛ましい血の聲に、

「元七！ 黒七！」

と啼きつゞけに啼いてゐた。失踪した我が子の行方を捜す熱心なる親心、身を殺して

強き愛着、烈し
き煩惱が、一念
小鳥と化して、
長へに歸らぬ子
の名を呼ぶので
ある。

までも子の行方を尋ねる強き愛着、烈しき煩惱が、一念小鳥と化して、長へに歸らぬ子の名を呼ぶのである。かくして哀しき傳説に生きる元七黒七鳥は、とこしなへに其の哀韻を啼きつゞけることであらう。 (趣味の傳説)

一〇文字

木枝増一

文字は言語をうつす形體的の記號である。我々が心に思ふことを他人に傳へるには言語で十分であるが、遠隔の地に傳へるとか、永久に保存するとかのためには、文字の力

木枝増一
文學士、奈良女
子高等師範學校
教授
京都の人
明治二十四年生

缺(欠)

獻(獻)

に依らなければならぬ。文字は言語の缺點を補ふために作られたものであつて、その人類の文化に與へた貢獻は實に偉大なものがある。世界の文字の系統には埃及文字と支那文字との二大別があり、我々が平素使用してゐる文字は、支那文字の系統に屬する漢字と國字と假名との三種類である。

漢字

漢字は支那で作られたもので、黃帝の時代に蒼頡といふ者が鳥の足跡から考案したと傳へられてゐる。我が國に漢字が傳來したのは、應神天皇の御代だと記録にはあるが、事實はもつと以前から傳へられてゐたものであらう。漢字の最初は簡単な繪畫に近いものであつた。

象形

減(減)

指事

○(日) 𠂇(月) 𠂇(山) 𠂇(水)

手(手) 𩺰(魚) 竹(竹) 田(田)

右の如く物の形を象どつて作つたもので、之を象形文字といふ。形をまねることの出来ないものは、象形文字を本としてこれに線や點を加減して工夫をこらした。

二(上) 一(下) 末(末) 本(本)

この様にして作つた文字を指事文字といふ。以上の象形と指事とは漢字の作り方の基礎で、之を更に組み合わせることによつて多くの文字が作られるのである。日と月とを組み合はせて明の字とし、木を二つ組み合わせせて林の字を作る。人と言とて信の字とし、口と鳥とて鳴の字とす

會意

場(場)

諧聲

轉注
假借

るやうに、文字の意味を合はせて新しい字としたものを會意文字といふ。又文字を組み合はせる時に一方からは意味をとり、一方からは音をとる場合もある。江、紅の字に於ける水、糸は意味を表し、工は音を表してゐる。鷄、鶴、鳩など皆これであつて、このやうにして出来た文字を諧聲又は形聲文字といふ。この方法で出来た文字は漢字の中でその數が非常に多い。以上は漢字の構造法であるが、この外に使用法の上に轉注、假借の二法がある。この六つを合せて漢字の六書と言つてゐる。

漢字の總數は約五萬と言はれてゐるが、今日日本で使用してゐるものは約五千位だと言ふ。けれども我々はその

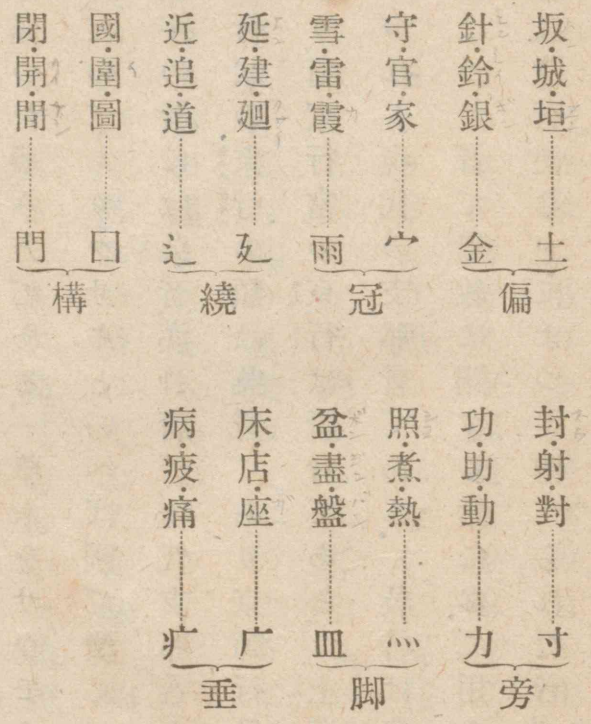
辭(辭)
畫(畫、画)

點、畫

繞(繞)
圍(圍)

全部の漢字を知つてゐる譯でないから、知らない漢字にぶつかつた時には辭書を引かなければならない。辭書を引くにはその字の畫と部首とを豫め知つて置く必要がある。漢字はすべて點(丶)と畫(一、丨、ノ、フ、し、丁等)とから出來て居る。隨つてすべての漢字はその點と畫との數を數へることが出来る。知といふ漢字は八畫であり、識といふ漢字は十九畫である。

漢字はその構成上、偏、旁、冠、脚、繞、垂、構の七つの部分から出來てゐる。偏は漢字の左の部分、旁は右の部分、冠は上の部分、脚は下の部分、繞は繞つてゐる部分、垂は垂れてゐる部分、構は圍んでゐる部分をいふ。次にその例を示して見る。



右の如き部分は辭書によつて漢字を引く時の大切な着眼點であつて、之を部首といふ。部首によつてその漢字が如何なる部に屬するかを知り、次に部首を除いた残りの畫

部首

一〇文字

六五

音、訓

數を數へて、その字を辭書の中から探し出すのである。
漢字には音と訓とがある。音は字音のことで、漢字本來の読み方であり、訓は字訓のことで、その字の示す國語の意味に従つた読み方である。草木をサウモクといへば音で讀んだのであり、クサキといへば訓で讀んだのである。

漢字の音には吳音、漢音、唐音、現代支那音の四種類がある。京都、行狀ぎやうじやうの京行きやうぎやうの類は吳音であり、京師、行爲ぎやうゐの京行きやうぎやうは漢音であり、南京、行宮ぎやうきゆうの京行きやうぎやうは唐音である。上海、漢口かんこう、芝罘あしふなどはいづれも現代の支那音である。吳音は我が國に最も早く傳はつた音で、佛教に關する語に多く用ゐられてゐる。漢音は、遣唐使などによつて傳へられた音で、唐の文化と共に

用ゐ(ひ)

遣唐

に盛んに我が國に用ゐられ、漢字の音の中では最も多く用ゐられてゐる。唐音は宋以後僧侶などによつて傳へられた音で、あまり多くは用ゐられない。現代支那音は地名その他特殊なものにだけ用ゐられてゐる。又同じ漢音でも善惡、憎惡、音樂、苦樂の惡樂の文字のやうに、意味を異にするに従つて音の違ふこともある。

漢字の訓は漢字の持つてゐる意味に相當する國語を宛てたものである。その宛て方は中々複雑である。山海、鳥獸、花空のやうなものあれば、今日、明日、叔父、叔母、海苔、香魚のやうなものもある。又隧道、燐寸、煙草、莫大小、襯衣等のやうに西洋語をあてたものもあり、七夕、流石、五月蠅等のやうに漢字

複一復、腹

と訓との關係のすぐには分らないものもある。又同字に對して多くの異訓のある場合があり、多くの異字に對して同訓のある場合があつて、漢字の文字と訓との關係は複雑である。

漢字の熟語は、音讀する時は二字とも音讀し、訓讀する時は二字とも訓讀するのが常であるが、小僧、野宿、敷布、團子、役場のやうに一方を訓讀し一方を音讀するものもある。小僧、野宿、敷布のやうなのを湯桶讀と言ひ、團子、役場のやうなのを重箱讀と言つてゐる。

國字は漢字の構成法にならつて我が國で作つたもので多くは會意文字である。辻、峠、袷、畠、凧、凧、凧、俵、籾の如きもの

湯桶讀

重箱讀

國字

や、哩、吋、糶、耗、疋、疋などはみなこれである。

假名は漢字の表してゐる意味を捨てて、その音だけを借りて國語を書き記したものである。假名の最初は萬葉假名であつて、阿伊宇江於や、あり(有)、なし(無)に、蟻、梨の字を用ゐる如きがこれである。今の平假名、片假名はこれから發達したものであつて、平假名は草書の體を簡單にしたもの、片假名は偏、旁、冠など字畫の一部をとつて作つたものである。假名と漢字との相違は、漢字が言語の發音と意味とを表すに對して、假名は言語の發音だけを示して決して意味を表さない點にある。この點で假名はローマ字と似た性質をもつてゐて、文字としては進歩したものである。平假名は

假名

點(点)

空海
弘法大師
眞言宗の開祖
承和二年(四九五)
寂、年六十二
吉備眞備
學者、政治家
寶龜六年(四三五)
薨、年八十三

空海、片假名は吉備眞備によつて作られたといふ言傳へがあるが、決して一人の手に成つたものではなく、平安朝の初期頃までに誰が創めたといふ事なしに自然に發達したものである。漢字から假名を發明工夫したのは、ひとへに日本人の模倣性と獨創性との調和によるもので、世界に誇るに足る事實である。

以上の如く我が國の文字は種類も多く、用法も中々複雑であるから、是を改良しようといふ意見も起つて來るのであるが、長い歴史的の發展を経て來たものであるから急には改變も出來ない。隨つて我々はその文字の本質をよく知つて、これを正しく活用する事に努力すべきである。

しよう

一一 誠拙和尚

窪田空穂
歌人
早稻田大學教授
名は通治
長野縣の人
明治十年生

窪田空穂

今から百二三十年前、寛政の頃、鎌倉の圓覺寺に誠拙和尚といふ高德の僧があつた。和尚は白隱禪師と並び稱された近代の名僧である。和尚が高徳なために、歸依者も新たに加つて來て寺の普請なども出來ることになつて、山門の建替などもあつた。その頃淺草の藏前に大口屋五郎兵衛といふ豪商があつた。これも和尚に歸依した一人で、或機會に青銅の五百羅漢を寄進して、山門の上に据ゑた。三尺位の像五百體のことであるから、當時の金で千兩以上もか

白隱
高僧。名は慧鶴、
俗姓長澤。駿河
の人。明和五年
(一四三六)寂、年八
十四。
三尺
約九十センチ。

かつたであらう。寄進としては莫大なものと呼された。
 いや、据付も濟んだと聞いて、大口屋五郎兵衛は寺ま
 りり旁、それを見ようと思つて、鎌倉へ行くことにした。五
 郎兵衛は腹の中ではその寄進が自慢であつた。あれだけ
 の寄進をしたことだ、寺からいつても大檀那である、きつと
 大事にしてくれるだらうと思つて、いつ何日に參るからと、
 豫め案内状を出しなほした。

定めて迎の者も出てゐようと思つて、鎌倉へ着いて見る
 と、それらしい者も見えない。變だなと思ひつゝ、圓覺寺の
 境内へはひつて見ても、やはり小僧一人出迎をしてはゐな
 かつた。寺なんてものは氣の利かないものだ、と五郎兵衛

圓覺寺
 臨濟宗圓覺寺派
 の大本山
 鎌倉五山の
 一條時宗創建

はや、不平を感じながら庫裡へ行つてその名を告げた。
 遠路の御參詣で、と言つて役僧は客間へ案内をしたが、一
 通りの扱で、何といふこともない。案内状のことがまだ通
 じてゐないと見ると五郎兵衛は察して、和尙に面會を求
 めた。

寒暖の挨拶

和尙の室へ導かれて、寒暖の挨拶が濟むと、直ぐに五郎兵
 衛は和尙が寄進の禮を言つてくれるだらうと思つて、今に
 言ひ出すか、今に言ひ出すかと待つてゐたが、そんな様子も
 見えない。五郎兵衛はとうとう、我慢しきれなくなつて、
 「時に今度の寄進の事ですが、和尙さん方はどう思召すか
 存じませんが、商人に取つては千兩といふ金はなかく、

善業を積む。

の大金です。禮を言つて戴かうとも思ひませんが、せめて何とか満足に思ふ位のことには仰しやつて戴けようと思つて居りましたのですが。」
と言つた。

五郎兵衛の口上を聞いた誠拙和尚は大喝した。そして言ふには、

「大口屋五郎兵衛が、自分のために善業を積んだからといつて、この和尚が禮を言はなくちやならないといふのか。」
さう言はれて、五郎兵衛は始めて自身の間違つてゐたことを悟つた。それから心を新たに於て修業を積んで、好い境涯に進み得た。

〔短歌隨見〕

一二 無類の的

まちやまりのなりだの的

奥州の白河に烏飼藏人といふ弓射の名人があつた。或る日諸國行脚の老僧が訪ねて來て、御主人に御目にかゝりたいと云つた。藏人はすぐに逢つた。老僧は慇懃に挨拶して、

「拙僧は御高名を慕つて遠國から參つたもので御座る。近頃不しつけなる御願ひながら、生涯の思出に、貴殿の御射術を拜見させて戴きたいと思ふが、叶ひますまいか。」
と頼み入れた。藏人は快く承諾し、やがて老僧を誘つて弓

諸國行脚の老僧

近頃不しつけな
お願ひながら、
生涯の思出に、
貴殿の御射術を
拜見させて戴き
たい。

藏人の顔には誇の色が見えた。

此の瞬く隙もなき働きの中に在つて、藏人の身體は造り据ゑた石像のやうに泰然として、臂の上の茶碗の水はさゝ浪だに立たなかつた。

場に立つた。藏人の顔には誇の色が見えた。

「では、拙い藝を御覽下さい。」

と云つて、弓を取つて矢を番へた。同時に茶碗になみくと水をついで左の臂に載せた。第一矢を放つたと見る中に二の矢が継ぎ、三の矢が継ぎ、四の矢、五の矢、六の矢、七の矢が繼いだ。前の矢の筈に後の矢の鏃が相接して、數本の矢が只だもう一本のやうである。そして此の瞬く隙もなき働きの中に在つて、藏人の身體は造り据ゑた石像のやうに泰然として、臂の上の茶碗にはさゝ浪だに立たなかつた。一々の矢が的の正皓を射たことはいふまでもない。老僧は感嘆して「あゝ」と言つたが、やがてつぶやいて、

まだ弓射の弓だ。神に入つた技ではない。

断崖は一面に苦むして、上には矛形の峯の面を白雲が去來し、下には千仞の淵が泡を立て渦をまいて居る。そして足がかりの岩角は辛うじて爪先を托するに

「しかしまだ弓射の弓だ。神に入つた技ではない」と云つた。藏人は聞きとがめて、

「御僧、何と仰しやりました。」

と尋ねた。老僧は

「いや詞で御答へは出来ませぬ。拙僧と一しよに山へ御出で下さい。」

と云つて先に立つた。藏人は弓矢を携へて従つた。

二人は遂に高い山の絶壁に攀ぢ登つた。断崖は一面に苦むして、上には矛形の峯の面を白雲が去來し、下には千仞の淵が泡を立て渦をまいて居る。そして足がかりの岩角は辛うじて爪先を托するに足るだけである。

足るだけであ
る。

老僧は先に立つて、悠然として藏人をさしまねいだ。見れば藏人は色が青ざめ、足がふるひ、そして冷汗ひやあせは衣をしぼつて踵まで濕ほして居る。老僧は云つた。

「足がかりは此の通りの大盤石で、向うには松が枝に鳶がとまつてゐて、無類の的で御座る。さ、御弓勢を御示し下さい。」

藏人は答へなかつた。老僧は言葉をついだ。

「藝に至つた者は、我を去り天地に同じて、どのやうな高い山、深い淵に臨まうとも、神氣の變はるものではない。然るに御事ごことは、前には誇る色があり、そして今はおどくして居られるではないか。まだ一御奮發を要しませうぞ。」

藝に至つた者は我を去り、天地に同じて、どのやうな高い山、深い淵に臨まうとも、神氣の變はるものではない。

藏人は我慢の夢を覺まして再び懸命の修行をした。

藏人は我慢の夢を覺まして再び懸命の修行をした。そして驕ることなく恐るゝことなき至上の達人となつた。

〔甲鳥園隨筆〕

薄田泣菫

詩人、隨筆家

名は淳介

岡山縣の人

明治十年生

張果老

玄宗（治世三十三

—四一五—四一五）

の頃の人

一三 仙人と石

薄田泣菫

支那の唐代に、張果老といふ仙人がありました。恆州の中條山といふところに棲んでゐて、旅をする時には、いつも驢馬に跨つて一日に數萬里の道程みちのりを往つたといひます。旅に疲れて家に歸つて休まうとでもする場合には、驢馬の首や脚をポキ／＼と折疊んで持ち運んださうです。途中に、思ひがけなく川に出水があつて徒涉かちたりがしにくかつた

時折長い尻尾を
ふつては羽蟲を
追つてゐまし
た。



(筆山觀村下) 老果張

りすると、この仙人は手にさげた折疊み式の馬に水を吹きかけます。すると、驢馬は急に元氣づいて、曲げられた四つの脚を踏み伸ばして、もとの姿にかへつたさうです。

或時、張果老が長い旅にすっかり疲れ果てて、驢馬から下りて、野中の柳の蔭で休んでゐました。驢馬はその傍でうまさうに草の葉を食べ、時折長い尻尾をふつては羽蟲を追つてゐました。すると不意に、

「おい、仙人どの、仙人どの。」

日の光はそこら
いつばいに流れ
て、廣い野原に
は自分たちの外
に、何一つ生物
の影が見えませ
んでした。

誰やら呼ぶ聲がしたので、張果老はうつら／＼する眼を開いてあたりを見廻しました。十月の静かな暖かい日の光はそこらいつばいに流れて、廣い野原には自分たちの外に、何一つ生物の影が見えませんでした。張果老はまた睡りかけようとしてました。すると、

「おい、仙人どの。仙人どのッてば。」

と、またしても自分を呼ぶらしい聲がするので、仙人は不機嫌さうに眼を覺ましました。

「誰だ？ わしを呼ぶのは？」

「わしだ、お前の前に立つてゐる石だよ。」

「なに、石だつて？」

仙人はずつと向うを見てゐた眼を急に自分の脚もとに落しました。そこには白い石が立つてゐました。仙人は氣むづかしさうに言ひました。

「お前か、さつきからわしを呼んでるのは？ わしは今睡りかけてゐるところなんだ。」

「それはすまなかつた。お前に逢つたら、是非一度訊いてみたいと思ふことがあるもんだからな。」

どこに口があるとも分らなかつたが、白い石はしつかりした聲で言ひました。

「何か、お前が訊きたいといふのは？」

「外でもない。わしは随分長くこゝに住んでゐて、よくお

どこに口があるとも分らなかつたが、白い石はしつかりした聲で言ひました。

前が驢馬に乗つてそこいらを驅けて往くのを見るが、恐しい速さだね。」

「速い筈さ。一日に五萬里を往くのだからな。」

仙人は得意さうに驢馬を見返りました。馬は主人の顔を見て、にやりと笑ひました。

「五萬里！ それは驚いた。」石はびつくりして、少し肩を動かしたやうでした。

「そしてそんなに速力の出る馬を、どこから手に入れることが出来たのだ？」

張果老は仙人らしい白いあご鬚を、細い樹の枝のやうな指でしごきました。

五萬里

約三萬三千キロ。(支那の一里は日本の六町に當る。一町は約百九メートル) 仙人は得意さうに驢馬を見返りました。馬は主人の顔を見て、にやりと笑ひました。

「どこからでもない。わしが自分の法力で拵へたのだ。わしはさういふ馬を、是非一頭ほしく思つたから。」

「なぜまたそんな途方もない馬がほしくなつたのだ？」

長年同じところにじつとしてゐる石には、仙人のそんな氣持が腑に落ちないらしかつた。

「わしは幸福の棲む土地を尋ねて、方々捜し歩きたかつたからだ。」仙人は昨日見た夢を思ひ出すやうな眼つきをしました。「わしはあれに乗つて、毎日々々どこといふ當てもなく、暴風のやうに驅けずり廻つたよ。わしが尋ね残した國は、どこにもないほどだ。この原つばも今日まで幾度通つたか、覚えきれない……」

昨日見た夢を思ひ出すやうな眼つきをした。
暴風のやうに驅けずり廻つた。

「さうして、その幸福とやらはうまく見つかつたかね。」

白い石は待ち切れないやうに口を出しました。

「まだ見つからない。そしてわしはすっかり年を取つてしまつた。」仙人はかう言つて、自分の姿を今更のやうに見返りました。「鬚はこの通りに白くなるし、手は瘦せて枯木のやうに細くなつた……」

「わしは昔からずつとこゝに立つてゐるが、別段それを不仕合せだとも、退屈だとも思つたことがない。わしがお前のやうに方々飛び廻りたく思はないのは、何故だらうな。」石の言葉は他人に話すのではなく、獨語のやうでした。仙人はそれを聞くと、深く頷きました。

待ち切れないやうに口を出しました。

幸福といふものは、外にあるものぢやない。

「わしもこの頃になつて、やつとさう思ひ出したよ。幸福といふものは、外にあるものぢやない。こゝぞと思ふところゝに落ちついて棲んでゐれば、始めてそこに幸福といふものが……」

ぢや

「それはお前にしては出来過ぎた程の思ひつきだ。どうだい、いつそこゝに落ちついて、わしと一緒に棲んぢや。お前にしても、もう一生のつゞまりをつけてもいゝ年齢だよ。驢馬の始末なら、明日にでも通りがかりの旅商人（たばかんど）に賣り拂へばいゝぢやないか。」

白い石が無遠慮にかう言ふと、驢馬は長い耳でそれを立ち聞きして、癢（かゆ）にさはつたらしく、いきなり後脚（あとあし）を上げてそ

こらを蹴散らしました。

人間といふものは、みんなこれまで自分のして来た仕事に引きずられて往くものだ。

「いや。わしにはそこまでの思ひきりが無い。人間といふものは、みんなこれまで自分のして来た仕事に引きずられて往くものだ。――あゝ、お前につかまつて、つい長話をし過ぎた。わしはもう出かけなければならぬ……」

張果老は哀しさうに言つて、自分の膝の上に落ちた砂埃を拂ひながら立ち上りました。石は見えぬ眼で、それを感づいたらしく、

「やつぱり幸福を求めて？」

「さうだ。幸福を求めて！……こんなにして方々駆けずり廻つて、やがて死ぬのが、わしの一生かも知れない。とに

駆けずり

かく、わしは出かけなければならぬ。

仙人は静かな足どり、驢馬のゐる方へ歩み寄り、
馬はそれと氣づいて、元氣さうに高いな、きました。

「そんなら、もうお別れだ。」

張果老はひらりと驢馬の背に跨りました。そして一
鞭あてたかと思ふと、馬は暴風のやうに飛んで、また、
中に、點のやうに小さくなる。

「とう／＼往つてしまつた。……わしはやつぱり一人ぼ
つちだ。」

白い石は低い聲で獨語をいつて、そのまゝ黙つてしまひ
ました。

暴風のやうに飛んで、また、
中に、點のやうに小さくなる。

秋の日はそろ／＼西へ落ちかゝりました。途を間違へ
たらしいこがね蟲が、土をもち上げて、ひよつくりと頭を出
しました。急にそれと氣づいたらしく、すぐにまた姿を隠
してしまひました。

〔草木蟲魚〕

一四 歌がたり

中村 秋香

或人、景樹の許に來りて歌は詠まゝほしきものなれども、
歌詞を知らざるによりてせんすべなしと歎きけるに、景樹
打笑ひて、歌はさるむづかしきものにはあらず、歌詞は知ら
でも、テニヲハは心得ても、我がおもふまゝの心を三十一文
字にのぶるが即ち歌なり。されば其のよむ事も花鳥風月

中村秋香
歌人御歌所寄人
静岡縣の人
明治四十三年歿
年七十
香川景樹
歌人
號は桂園
因幡鳥取に生れ
京都に住む
天保十四年歿
年七十六
我がおもふまゝの
心を三十一文

字にのまらば即ち歌なり。

花鳥風月

には限るべからず、日用の事柄、臺所の道具にても、よまんと
 思はゞよまるべし。歌詞を知り、テニヲハを心得ねばよま
 れずといふ如きものにては、畢竟歌とはいふべからざるな
 りと、語らふ折から、門外を豆腐屋の豆腐々々と呼びつゝ賣
 りゆくを聞き、あの豆腐屋を題にて歌一つよみて見給へと
 いふ。其の人答へて、そは殊にむつかしき事なり、花とか月
 とかいふ事ならんには、知らぬながらも猶ほ何とかつゞけ
 方もあるべし、豆腐にてはせんすべなしといふ。景樹ほゝ
 るみて、左迄にむつかしく思はれんには、よみてきかせ參ら
 すべしとて、今そこに豆腐屋の聲きこゆなり、これにて上の
 句は出來たり。今門前に豆腐屋の聲きこゆる故に、其の儘

をいひたるなり。儲下の句、おさん出て呼べ行きすぎぬま
 に、これにて一首となりたり。別に歌詞にはあらず、常の詞
 なり。又其の趣向も珍らしき事にはあらず、家内にて常あ
 る事なり。されば歌といひたりとて、歌詞を知らずではよま
 れずといふが如きむつかしき事にてはあらずと、いひたり
 きとぞ。そもく、俗言もて述べたる歌は、兎角狂歌めきて
 品格を失ふものなるを、ひとり景樹の此の歌の如きは、全く
 俚俗の語をもて俚俗の事を述べたれども、何となく品格あ
 り、歌の體を失はず。是れ景樹の景樹たる所以にして、その
 景樹の景樹たるは由る所あるに依る。さればこそ俗語を
 もてつらねたれども、此くの如き風調ある歌とはなれるな

此の歌の句調、
忽ち俗言をのせ
てすらくと口
に出でたるまで
なり。

れ。其の由るところといふものこそ、歌よむ上に就きて心得おくべき事なれ。何ぞとなれば、景樹の此の歌は「高まどの尾上の櫻さきにけり、いざ見にゆかん散りすぎぬまに」といふ歌の句調に基きたるものなり。「今そこに豆腐屋の聲きこゆなり」の句は「高まどの尾上の櫻さきにけり」の句調なり。「おさん出て呼べゆきすぎぬまに」は「いざ見にゆかん散りすぎぬまに」の句調なり。これ景樹が豆腐屋の歌よむ時、此の歌の事を思ひ、其の句調を取りてよみたるにはあらず、景樹の腦中此の歌ありて、豆腐屋の聲をきくと其の儘、此の歌の句調、忽ち俗言をのせてすらくと口に出でたるまでにて、景樹自身に於いても、もとより此の歌の句調に因由せ

詠歌のみならず、詩人の詩を作り、文章家の文章を屬る、亦皆先達の句調語に借るものなり。

し事は知らざりしなるべし。されど仔細に之れを分析すれば、全く高まどの歌の調に基きしものなり。さてこれは特に景樹のみならず、すべての詠歌亦皆先達の句調によらざるはなし。又ひとり詠歌のみならず、詩人の詩を作り、文章家の文章を屬る、亦皆先達の句調語調に借るものなり。されば先達が各種の詩歌文章を能くわが腦中に蓄藏するに於いては、其の詞藻、句調、體裁、皆我が材料となり、事に應じ、物に觸れ、忽ち我が思想を載せて、歌に、詩に、文章に現はれ出づべし。さるからに其の腦中の材料となり、思想を載する器となるものは、最も深く注意して選ばざるべからず。

〔歌がたり〕

落合直文
國文學者
號は秋廼舎
仙臺の人
明治三十六年歿
年四十三

一五 蓑蟲に

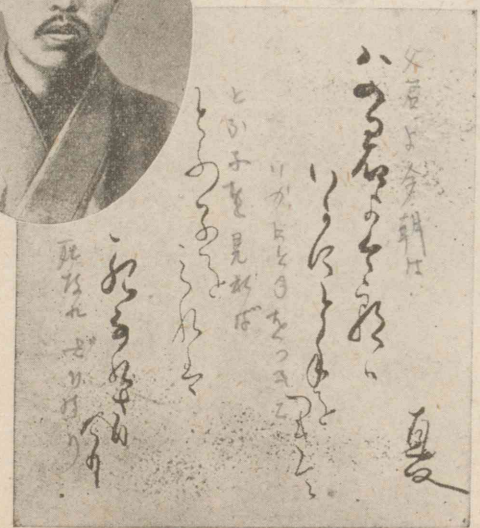
落合直文

蓑蟲にわれあらねども秋風になき父をのみ戀ひわた
るかな
母の背にむかしながめしわが身とは知るや知らずや
ふるさとの月
世に媚びぬこゝろも見えてなかくに瘦せたる菊の
おもしろきかな

父君よ今朝はいか
にと手をつきてと
ふ子を見れば死な
れざりけり

父と母といづれかよきと子に問へば父よといひて母
をかへりみぬ

緋緘の鎧をつけて太
刀佩きて見ばやとぞ
思ふ山櫻花
霜やけの小
さき手して
蜜柑むくわ



落合直文の筆蹟

が子しのばゆ風の寒きに

片假名のかたなりながら文かきて子はおこせたり年
のはじめに(安房にて)

わがおくる麻のさごろもぬぎすてゝはや身にまとへ
あやに錦に(大町桂月に)

二つなきものなりながら事しあれば千々に碎けて物
をこそおもへ(心)

大町桂月
文章家
名は芳衛
高知縣の人
大正十四年歿
年五十七

一六 冬の雪國 その一

同じく我が國土の中ながら琉球臺灣に住む人々は雪と
いふものを知らぬ。まして雪國の冬の有様など、彼等には
嘘ウソとしか思はれまい。

寒國では霜が降り出すともうそろ／＼冬籠りの支度に
取りかゝる。庭木や果樹は丈夫な丸太を支へとして、小枝
をば繩で吊して雪折れを防ぎ、小さい木は板や蓆むしろで圍つて、
凍らぬやうにする。家の外側は、鴨居鴨居から二尺ほどあけて、
其の下は悉く板で圍ふ。障子の合はせ目には、紙を貼りつ

積もつては消え
消えては積もる

けて、吹雪を防ぐ用意をする。これを目貼めはりといふ。雪圍と目貼とがすめば、冬籠りの支度はまづ整つたと云つてよい。遠山の頂に見えた雪が、次第に麓の方へ進んで来て、里に降りはじめるのは、凡そ十一月の初めであるが、それから積もつては消え、消えては積もる中に、冬至とうじ頃になると、地上の雪が、しつかり固まつて消えなくなる。これを「根雪」といつて、これから翌春の三月頃までは、地面を見ることがない。雪國の冬の生活は根雪から始まる。

雪催ひの寒い晩

根雪となれば、あとはたゞ降るばかり積もるばかり、寒い盛りには一日に五六尺も積もることがある。雪催ひゆきもよひのひどく寒い晩は、よく爐に焚火たきして更あけるまで語りあふ。外

おしつけるやう
に寒くなる。

は森しんとして何の音もない。空は眞暗で一物も見えぬ。話の進むにつれておしつけるやうに寒くなる。

かういふ夜が最も多く積もる時で、翌くる朝目を覺ますと、耳が切られるやうに冷たい、息が凍つて夜着の襟えりが白くなつて居る。起き出でて臺所へ行けば、屋根裏の煤すすや蜘蛛の網が、銀モールのやうに眞白に凍つてゐる。これを「しらぶが張る」といふ。髭ひげにも氷柱つらなが下がる。銅盃どうがいを取れば手について離れぬ。鍋なべを取れば鉸つばが指に凍りつき、煙草を吸へば煙管の吸口すいこうが唇に凍りつく。無理にはがせば皮がむけてしまふ。窓を開けば積雪腰を没するばかり。えらい寒さだ、寒暖計は！と見れば、華氏の水銀が最下の一點に縮

華氏の水銀が最
下の一點に縮み

込んで、ぼつちりとも上つて居らぬ。

み込んで、ぼつちりとも上つて居らぬ。
積もつた雪は踏み固め、或は拂ひのける。雪を踏むには「深沓」といふものがある。膝にかゝるほどの藁製で、一尺前後の雪にはこれで間に合ふが、二尺餘にもなればカンジキをかけねばならぬ。尙ほ深く積もれば、其の上に米俵をはき、下固めして其の上を再び固め直す。道が高くなつてからは、雪搔を以て道の兩側に搔き上げる。搔き上げるに随ひ次第に高くなつて、遂には銀のしろがね高い堤が出来上がる。其の堤が時としては二間以上になることもある。道幅の狭い、雪の拂へぬ處では、いつまでも踏み固めるので、道路が家の軒よりも高くなる。往來へ出るには、戸口から穴を掘り、



冬の雪の圖

段階をつけて雪の梯子を上らねばならぬ。まるで一種の穴居生活である。

屋根の上にも雪が積もる。三四尺になると下さねばならぬ。謂はゆる「雪下^{ゆき}して、年に三四回は普通である。下す毎に軒端の雪が益々高くなり、時には軒よりも高くなる。かやうな場合に最も人を困らすのは吹雪で、一吹き吹きすさめば屋根の雪と地面の雪とが平らに閉ぢ合はされてしまふ。家の内は闇になる。慌て、開けばやがて又閉ぢ合はす。全く人と雪との戦ひで、雪のやり場の無い處では、雪塊を橇に積んで遠方の川に棄てねばならぬ。

雪中生活で最も怖ろしいのはザキといつて雪の上を走

る洪水である。幅の狭い河流は、嚴冬の眞中になると、やもすれば氷結する。氷結した上に上流の水が堰かれ、て、遂には積雪の上を走つて、高窓から瀧の如く室内に注ぎ込む。寒中のしかも窓の上から落下する洪水である。言葉通り、寐耳に水の大騒ぎで、町中總出して川筋の氷を切り開くあわたゞしきは言葉にも筆にも盡くされぬ。

一七 冬の雪國 その二

細き太き短き長き無数の氷柱が軒から下がつた状態は、研ぎすまし

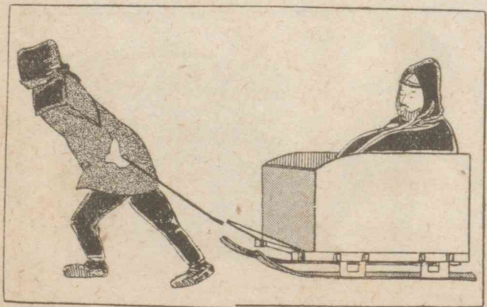
美しいのは氷柱である。方言に金氷ともいふ。細き太き短き長き無数の氷柱が軒から下がつた状態は、研ぎすまし

した剣を倒まに吊したやう、筈が倒まに生えたやうである。

大厦高樓

た剣を倒まに吊したやう、筈が倒まに生えたやうで、それが日光を受けて照り耀く時は、水晶の簾かとも疑はれる。長さの四五尺、徑の二三寸は不斷に見る所で、大厦高樓から垂れ下がつた氷柱には、徑二三尺、それが大地までつゞいて、地面から生え抜いた巨柱のやうに見えるものも少なくない。

子供の遊びには、雪達摩、雪女房、御堂作り、坂作り、隧道作り、雪合戦など、皆取り取りに趣味はあるが、わけて楽しげなのは雪滑りである。根雪になると車馬が廢つて橇の世の中になる。橇は雪中唯一



橇

道路の雪が磨り
みがかれて鏡の
やうになる。

物の數でもな
い。

の運搬器で、家として備へぬはない。晴
天がつゞいて橇が頻りに通ると、道路の
雪が磨りみがかれて鏡のやうになる。
あぶないこと甚だしい。油断をすれば
直ぐに轉ぶ。老人や用心深い人は、下駄
足駄のうらに釘を打ち、藁靴に鐵カンジ
キをつけて、おづく〜とねらひ歩くが、待
ちかねるは子供で、彼等は遅しと竹ボホ
ラといふ滑下駄をはいて、パンく〜ツウ
と勢よく滑り出す。橇あとの光る所を
ギガといふ。一二三間のギガは物の數で



東 装 雪

心ゆく遊び。

もない。賑やかな往來には一町あまり疵なしの鏡を展べ
た所もあり、巧みな子供は「先よけく〜」と呼ばはりながら、一
二町は物の見事に一息に滑りぬく。馴れぬ者の側目には
冷汗するほど危なく見えるが、馴れた者にはこれほど心ゆ
く遊びはない。

寒が明いて春雨が降り出すと、積もつた雪の嵩が減つて、
どツしりと締まつて来る。此の締まつた雪の、夜半に凍つ
たのを「堅雪」といつて、これがまた暖國人には思ひもよらぬ
ものである。今迄は綿の如く柔らかで、脛を没し身を没し
た雪が、堅雪になると、靴でも下駄でもぬからなくなる。田
畑も野山も石のやうに堅くなる。かうなると學校に通ふ

子供は、田でも畑でも見通しに一直線の近路を行く。濶歩して野山に魚かり兎狩りに出かける。「かんく」堅雪、甘いか辛い^{ツライ}か嘗めて見ろ。」といふのが、彼等の堅雪を踏みながら唱へる文句である。

堅雪時の魚の捕り方が又面白い。小川ならば魚の居さうな所へ行つて、上流を堰きとめる。次ぎに目ざした場所へ雪塊を山の如く投げ込むと、水は忽ち干てしまふ。其のあとで泥を搔きわけて鯉^{コイ}、鮒^{フナ}、鯰^{ナマズ}、鱧^{ハシラ}、逃がす氣遣ひなく思ふまゝに生捕られる。池や堀や湖水ならば、厚氷を渡つて、目星をつけた所に行き、鋏や鋸で氷を割つて一二尺の口をあけ、板を以てしきりに水をかい出せば、大魚小魚^{オホイサコイサ}潑刺として氷

大魚小魚潑刺として氷盤の上に躍りあがる。

盤の上に躍りあがる。塙保己一は燈火が消えた時に目明きの不自由を憫んだといふが、雪國の者の目には、暖國の方が却つて不自由に見えるかも知れぬ。

雪國には、雪の降るにつけて、また特別の職業がある。労働者の職業は雪おろし、雪掘り、雪運び等で、彼等は雪が降らねば仕事が無い所から、稼ぎ道具の雪搔に燈明を供へて、「白雪大明神降らせ給へ、降らせ給へ。」と祈る。

處かはれば品もかはるが、何處の隅でも、天の恵みの到らぬところはない。

處かはれば品かはる。

一八 勞苦と快樂

憂き事のなほこの上につもれかし

かぎりある身の力ためさん

これは人間不屈の勇氣を具象した壯快無比の作として、久しく人口に膾炙した古歌であるが、これを口ずさめば、大抵の人間は愚圖々々して居られなくなるであらう。さうして自分の過去を振返つて、恥かしさに堪へぬ氣持がして來るであらう。そして又憂き事苦しき事に一種の樂しみと勵みとを見出だすやうにもなるであらう。

昔から世に優れた人は、いづれも仕事をすることに無限の喜びを感じ、勞苦そのものに此の上なき幸福を感じた人であつた。

グラッドストーン
(1809—1894)
第十九世紀に於ける英國の大政治家

凡そ仕事と名のつく以上は、どんな仕事でも必ず苦しみの伴ふものである。成功の祕訣は此の事實を覺悟して、仕事其の物に眞の興味を見出だし、勞苦其の物に眞の愉快を覺えるにある。昔から世に優れた人は、いづれも仕事をする事に無限の喜びを感じ、勞苦その物に此の上なき幸福を感じた人であつた。グラッドストーンは九十歳近くになつて、「私は勞苦に最大の幸福を發見した。私は若い時分に勤勉の習慣をつけたが、この勤勉の習慣をつけたといふ其の事が、勤勉に對する立派な報酬であつた。若い人は、多く休息といふ事をば努力を中止するといふ意義に解釋するやうであるが、私は眞の休息は一つの努力から他の努力に

偉大なる人々は決して餘生を安樂に送るために勉強するものではない。彼等は勉強することに快樂を感じるの

エヂソン (1847-1931) 米國の電氣學者發明家

移る事だと思ふ。」と云つて居るが、誠に尊い教訓である。偉大なる人々は、決して餘生を安樂に送るために勉強するものではない。彼等は勉強することに快樂を感じるの

偉人天才といはれる人々は、生れつきよりも寧ろ勤勉によつて才能を發揮したものが、多い。

ラファエル

(1483-1520)

文藝復興期のイタリーの畫家

ミケランゼロ

(1475-1564)

文藝復興期のイタリーの畫家、詩人、彫刻家、建築家。



碑念記のそとソサエ

よつて才能を發揮したものが、多い。如何によい素質を持つて居ても、捨て、置いて光る道理がない譯である。有名な畫家ラファエルを、ミケランジェロが批評して、「彼れの偉大は、彼れの天才よりも寧ろ彼れの勤勉に負ふ所が多かつた。」といつたのは至言である。ラファエルは僅かに三十七歳で歿(ま)つたが、それにも拘はらず、實に二百八十七枚の繪とある人がラファエルに向つ

五百以上の素描とを殘した。

ミレー
(1814-1875)
フランスの畫家
好んで農民を畫
き、文藝味宗教
味に富んだ點で
名高い。

て、「どうしてこんな偉大な仕事が出来ましたか。」と尋ねたら、
彼れはやさしい聲で、「私は小さい時分から何事をも好い加
減にしなかつたのです。」と答へたといふことである。フラ
ンスの有名な畫家ミレーも、「私は凡ての少年に向つて、たゞ
働けと忠告するだけである。皆が皆、天才になることは不
可能であるかも知れぬが、皆が皆仕事をすることは可能で
ある。どんな天才でも仕事をしなければ何にもならぬ。」と
云て居る。

人といふものは、とかく他人の仕事を羨ましがらるもので
ある。それは、どんな仕事でも、表面は樂なやうに見えるか
らで、従つて他人のやつてゐる仕事に携はつて見ると、始め

ホレース・マン
(1796-1859)
米國の教育家

どんな職業に従事して居ても、
その職業は決して人間の品性を
左右するものではない。それに
従事する人の心の如何によつ
て、その職業が

てその苦しさがわかつて、自分のもとの仕事が戀しくなつ
て來るものである。若し凡ての人が、仕事をする事その事
に快樂を感じるならば、仕事の種類は問題でなくなるであ
らう。だからホレース・マンも、「自分の現在の仕事を嫌つて
他の仕事に移る人の氣が知れない。私に取つては仕事す
る事その事が、魚の水に於けるやうな關係になつて居る。」と
言つて居る。

どんな職業に従事して居ても、その職業は決して人間の
品性を左右するものではない。それに従事する人の心の
如何によつて、その職業が卑しくもなり、又尊くもなるので
ある。また職業のために手や足を汚染することは、決して

卑しくもなり、又尊くもなるのである。

ソロモン

(前-1000頃)

ヘブライの王
ソロモンの箴言
舊約聖書中に收めらる。

その心を汚染するのではなくして、寧ろその心を清淨シヤウジヤウならしめるのであるといつてもよい。外見の穢オタシい職業に孜孜として働いて居る人の姿を見れば、崇高な感じこそすれ、穢オタシいといふ感じは毛頭ウケもしないものである。だからソロモンの箴言にも、「汝かの事務に勤勉なる人を見ずや、彼れは國王の前に立つことを得べし。」とあつて、如何に勤勉の尊いかを教へて居る。

タイラー

(1790-1862)

アメリカ合衆國
の第十代の大統領

アメリカ合衆國の大統領タイラーが、任期が満ちて退職すると間もなく、其の政敵は彼れをオシロウ翻弄するつもりで、彼れを其の居村の測量師に選んだ。タイラーは、いやがるかと思ひの外、喜んでその職を引き受け、しかも一所懸命にその

仕事に従つた。これにはさすがの政敵等も降参して、もういゝ加減に辭職してはいかゞですかといふと、タイラーは平然として、「私はどんな仕事でも引受けるが、一旦引受けた以上、決して辭職は致しません。」と返答したといふことである。

仕事といふものは、人間を尊くするばかりでなく、人間を種々の危険から遠ざからしめるものである。「小人閑居して不善をなす。」と古言にも云つて居るが、小人に限らず、凡て人間といふものは、ぼんやりして居る時に、碌ロクな事を考へるものでない。犯罪學上の統計を見ても、倦怠ケンタイ即ちフランス語の謂はゆるアンニユイが、各種の犯罪の極めて重大な原

仕事といふものは、人間を尊くするばかりでなく、人間を種々の危険から遠ざからしめるものである。

因となつて居るのである。オーウン、フェタムは「事務の中に生長しない者は最も下劣な人間だ。」といつて居るが、私はむしろ「仕事をしないものは最も危険な人間だ。」と言ひたいと思ふのである。

何事をするにも、人はとにかく仕事を早く仕遂げたいと希望するものである。いはゞ成功を急ぐのであるが、これも畢竟ずるに、勤勉勞苦そのものに快樂を發見し得ないため、眞に勤勉なる人は、一面からいふと頗る氣の長いものである。ダーウインは蚯蚓の研究に對して實に前後三十年を費して居る。文豪ゴールドスマスは一日に四行づつ書けば十分だと云つて、名高い「荒村行」を書くのに前後七年

ダーウイン
(1809—1882)
英國の博物學者
生物進化論の創
唱者

ゴールドスマス
(1738—1774)
愛蘭土の詩人
歴史家、小説家

を費した。而も彼れはその四行を書くのに、一日かゝつて、ウン／＼云つて苦しんだと云ふことである。

急がずば濡れざらましを旅人の

あとより晴るゝ野路の村雨

といふ歌もある通り、成功を急ぐのは、決して成功をもたらす所以ではない。有名な「ローマ衰亡史」を書いたギボンはその第一章を三度書き直して始めて満足したといはれて居るが、全篇を完成するのに、實に二十五年の歳月を費したのである。

人間は如何に努力勉強しても、若し勞苦そのものに快樂を覺えるならば、決して過勞といふ現象の生ずるものでは

ギボン
(1737—1794)
英國の歴史家

人間は如何に努力勉強しても、若し勞苦そのものに快樂を覺える

るならば、決して過勞といふ現象の生ずるものではない。

スタンレー
(1841-1904)
アフリカ探検家

ない。過勞といふ現象の生ずるのは、成功を急ぐか、又は勤勉勞苦に興味を持たぬからである。それゆゑスタンレー卿も「どんなに激しい仕事をして、確乎して規則正しく進んで行くなれば、決して身體を害するものではない。」と云つて居る。實際若し過勞のために病氣になつた人があるならば、それはその人が仕事に對する興味を少しも持たなかつた證據だと云つてよいであらう。

〔小酒井光次の文に據る〕

一九 無名の指

鳩翁 道話

孟子曰はく、今無名の指あり、屈して信びず。疾痛事に害

小酒井光次
醫學博士
文學者
不木と號す
名古屋の人
昭和四年歿
年四十

孟子曰、今有、無

名之指、屈而不信。非疾痛害事也。如有能信之者、則不遠晉楚之路。爲指之不若人也。指不若人、則知惡之。心不若人、則不知惡。此之謂不知類也。

仁、人心也

學問之道無他、求其放心而已矣。

あるに非ざるなり。如し能く之れを信ぶる者あらば、則ち晉楚の路を遠しとせじ、指の人に若かざるがためなり。指人に若かざれば、則ち之れを惡む事を知る。心人に若かざれば、則ち惡む事知らず。此れを之れ類を知らずと謂ふなり。「扱これは前晚辯じました仁は人の心なり」の次ぎの章でござります。即ち「學問の道、他無し、其の放心を求むるのみ」といふ言によつて、孟子がまた譬を引いて、人の心の大切なる事を御示しなされたのでござります。今とは今ここに申すことぢや。無名の指とは小指の隣の指でござります。其の外の指は、親ゆびを大指といひ、人さしゆびを頭指といひ、高々ゆびを中指といひ、小ゆびを小指と申しま

す。たゞ小指の隣のゆびに名が無い。そこで名の無いが名となりまして、無名の指と申します。何ゆゑまた名がないぞといふに、とんと用のない指ぢや。物を握るは親ゆび小ゆびの力、つむりをかくは人さし指、酒のかんを試みるは小指の役、皆それ〴〵に用があれば、無名の指ばかりは無用の指、有つて邪魔にはなりません。無くては事も事はかけませぬ。一身のうちにて最も軽いものぢや。其の指が屈んでのびぬ。勿論痛みもかゆみもない。故に疾痛事に害あらずと申してある。畢竟無くても苦しからぬ指なれば、曲つてあつても痛みさへなくば、捨て、おいてよい筈なれども、もしこれをよく伸ばしてくれる醫者どのがあると聞い

たら、道の遠いもいとはず、定めて療治を受けにゆくであらう。それは何ゆゑ、指が世間の人と少し違つてあるゆゑ、恥かしようおぼえて、療治を受けますものぢや。そこで指の人に若かざるがためなりと申してござります。

羞惡之心、義之端也。
也。(孟子の語)

成程よう人は恥を知つたものぢや。其の筈でござります。羞惡の心は義の端なり。と申して、恥を知るが人の生れつき、しかしながら其の恥を知るに二様ござりまして、姿の恥を知つて、心の恥を知らぬ人がござります。是れはきつい御了簡ちがひぢや。心ほど大切なものはござりませぬ。心は身の主と申して、一軒の内では旦那殿と同じことぢや。その旦那殿の心が煩ひ苦しんでゐるを捨て置いて、家來の

からだばかり可愛がり、膝頭すりむいた、ほくちを付けい。「灸がいぼうた、膏藥はれ。」風ひいた、葛根湯、根ぶか雜炊、生姜ざけ」と、かりそめにも身體からだの御世話はなされまされど、心の事は一切御かまひなしぢや。人に生れて人のやうな心ももたず、鬼のやうな心を持つたり、狐のやうな心を持つたり、蛇のやうな心を持つたり、鳥のやうな心を持つて、恥かしいとも思はず、からだばかり吟味してござるは、どういふ所から間違うて來たやら。此の間違は古うある事と見えて、「指人に若かざれば、之れを惡むことを知る、心人に若かざれば、則ち惡むことを知らず、此れを之れ類を知らずと謂ふ」と、孟子も仰せられた。是れは重いと軽いとが分からぬのぢや。

指不_レ若_レ人知_レ惡_レ之_レ心不_レ若_レ人則_レ不_レ知_レ惡_レ此_レ之_レ謂_レ不_レ知_レ類_レ

燒物を引いてまはると、はや目の玉がきよろつき出し、

大を捨て、小を取ると申すものでござります。人情は一般小は嫌ひ、大はすき、軽いは嫌ひ、重いは好きぢや。そこで親類縁者へ招かれて、御馳走にあづかる時、本膳が出たあとから、燒物を引いてまはると、はや目の玉がきよろつき出し、向う三軒兩隣をにらみ廻し、わが燒物と見くらべて、隣の燒物が五六分ほど大きいと、肝癢が胸につつぱり、「これの亭主は何と心得てゐるぞ。太郎兵衛も御客、おれもお客ぢや。なんておれには小さい燒物をつけたのぢや。何ぞこれには意趣遺恨でもある事か」と、腹の中がねぢれ出す。能う思うて御らうじませ、燒物に何の遺恨があらう。是れほどの僅かな事でも、小を嫌ひ大を取る。それに何ぞや、指の曲つ

かたちこそ
古今集、雜部、
兼藝法師の作。

たのを恥かしう覺えて、心の曲りは苦にならぬといふは、大
を捨て、小を取ると申すものぢや。さるによつて、孟子も
「此れを之れ類を知らずと謂ふ。」と御叱りなされた。なんと
人は能ううろたへたものぢやござりませぬか。古歌に「か
たちこそ深山みがくれの朽木なれ心は花になさばなりなん。」
指や足にかゝはつた事ぢやござりませぬ。

二〇 野口英世

橋 輝 政

橋輝政
著述家 新聞記
者 福島縣の人
明治三十年生
野口英世
福島縣の人、醫
學博士、理學博
士、帝國學士院
會員、ロックフェ
ラー研究所部
長、昭和三年歿、
年五十三。
翁 島
福島縣耶麻郡翁
島村猪苗代湖の
西北岸、會津街
道の一村。
釋(釈)
渡部ドクトル
渡部 鼎。

明治三十三年十二月五日、野口英世博士は愈、米國に留學
すべく横濱を出帆した。母堂もはるく、郷里の翁島から
出て來て、當分逢はれない博士の姿を見守つた。幾人かの
見送人に會釋した博士は、さすがに感慨無量であつた。
十六の春、會津若松の渡部ドクトルを頼りに村を出て、二
十歳の夏から帝都に苦學を續けた身の、二十五歳の今日し
も多年の希望を達して海外に旅立つのである。
船は埠頭を離れた。ハンカチーフは打振られた。

消え。

輝いた。

汽一氣、滾

シヤトル

米國西北海岸の
港市、横濱から
の距離は大環航
路によつて七八
九〇軒、人口三
十七萬、日本郵
船會社の汽船發
著所。

衝一衝

晝(昼)

丈の低い博士の體軀は、船の進行するにつれ、次第に小さく
なつて消えてゆく。母堂の兩眼には子の前途に恙なかれ

と念ずる涙が輝いた。



野 口 英 世

汽船は二十日目米國の
シヤトル港に著いた。博
士はそこで幾千哩彼方な
る故國の空を眺めて、孤獨
の寂しさを感じずるよりも、

先づ異境の新天地に一步を踏み入れた誇らかな衝動を満
身に感じた。

汽車で三晝夜、一路北米の大陸を横斷して、博士は直ちに

フィラデルフ、
米國の東北にあ
つてニューヨー
ク、シカゴにつ
ぐ大都會、人口
二百萬。
ペンシルヴァニ
ヤ大學
米國東北部ペン
シルヴァニア州
フィラデルフィヤ
市にある大學。

フレキシナー
明治三十二年、
來朝當時野口博
士は同氏の滞在
十日間その案内
役をつとめてそ
の知遇を得た。

託(托)
涌(湧)

フィラデルフィヤ市のペンシルヴァニア大學に、フレキシ
ナー教授を訪問した。この人は、博士が其の一身を託すべ
く、一刻も早く面會せねばならぬ米國に於ける唯一の知己
であつたのである。

壯大な校舎の簡素な應接室に於て、博士は夢寐にも忘れ
なかつたフレキシナー氏の温顔に接した。別來一年半、涌
き起る萬感を抑へつつ、博士は同大學入學の希望を陳べて
指導と助力とを懇請した。

何事も快く引受けたフレキシナー氏が、翌日、大學の總長
に交渉すると、此の際の入學は許せない、來春の新學期開講
まで待てとのことであつた。これには博士も失望した。

末未
駢驅
市中は俄に駢足を始めたやうに落著
を始めたやうに落著かない雰圍
氣の中に立つ。

だらう。

問うた
以前
明治三十二年
頃。

聞いて

折しも歳末ではあり、市中は俄に駢足を始めたやうに落著かない雰圍氣の中に立つて、博士ははたと當惑した。その年も押詰つた三十一日の夜、フレキシナー氏から「ちよつと來るやうに。」との使があつた。「何事だらう。」と、博士は早速出かけて行つた。すると、氏は直ちに博士を引見して、「君は蛇毒の研究をした事がありますか。」と問うた。博士は以前東京の傳染病研究所にゐた時分は、ぶの研究を試みて、これに興味を持つてゐたので、その事でありのまゝ答へた。

フレキシナー氏はこれを聞いて、にこやかに打領き、「それなら早速蛇毒の研究を始めなさい。」

隣鄰

千九百一年
明治三十四年。

撲撲
桑港

北米合衆國カリ
フォルニヤ州の
良港、太平洋に
面してゐる。
業績(業績)
成績(成績)

伎倆(伎倆)
嘆歎

幹幹

といつて、わが研究室に隣る一室を與へた。博士は大いに喜んで、その翌日即ち千九百一年の元日から、その研究室に閉ぢ籠り、同氏の助手として、朝から晩まで研究に従事した。間もなくフレキシナー氏は、ペスト撲滅の命を受けて桑港に出張した。一ヶ月の後、フレキシナー氏が歸り來るや、待ち兼ねてゐた博士は、不在中に研究した業績の幾つかを報告した。フレキシナー氏はその優れた成績に驚き、「君は非凡な伎倆を持つてゐるぞ。」と心から感嘆した。

この報告論文の摘要が、米國科學研究會の機關紙に載るや、ペンシルヴァニア大學はいふまでもなく、米國科學界の異常なる注目を惹き、その結果、同大學名譽總長の斡旋に依

向う(ふ)。
カーネギー
米國の大實業
家、製鐵王と稱
せられてゐる
西曆一九〇九年歿
年八十二。
千一十
交付—寄附

箇(個)

つて、米國科學研究會から向う一ケ年二千弗の研究費を受
けることになつた。次いでカーネギー研究所からも、約二
年間若干の獎勵費を交付された。その後、同大學教授會で
は満場一致を以て、マスター、オブ、サイエンスの學位を授與
することにした。これは同大學の卒業生が受ける特典で
ある。渡米一年ならずして、博士は同大學五箇年の課程を
終へたと同じ實力を認められたわけである。

博士の、細菌學者としての位置は目ざましきまでに高ま
つて來たが、その生活は質素極まるものであつた。博士は、
フレキシナー氏の助手として世界を驚かす新研究を重ね
ていつたが、これに依つて受ける手當は、月額わづかに二十

留(止)

科學の三昧境に
浸る幸福を満喫
した。

譬(比喩)……尻

五弗であつた。しかし生活苦は豫期してゐたことだから、
別段意に留めず、寧ろ一室を占領して、朝から夜まで自由に
研究の出来ることを何よりの楽しみとして、科學の三昧境
に浸る幸福を満喫した。

日本をたつとき著て行つた一張羅の洋服は、二三年の間
に、ズボンといはず、上衣といはず摺り切れてしまつたが、そ
んなことは一向に無頓著であつた。「おい、君のズボンの譬
にペイントが附いてゐるぜ。」と、友人が眞面目に注意する
ことがあつても、博士は笑つて聞き流してゐた。それはペ
イントではなく、ズボンの破れ穴から下著が喰み出してゐ
るのであつた。米國科學研究會やカーネギー研究所から、

毎年二千弗、三千弗の補助があつても、研究をより深くより廣く進めるためには、決してあり餘る金額ではなかつた。動もすれば、博士は定收の二十五弗をさへ研究費に割くがために、一日に三度のパンをとる事が出来ない事もあつた。博士はフレキシナー氏の助手として、三年を経過した。その間、蛇毒に關するあらゆる試験を遂げた。世界に於ける蛇毒關係の研究は、博士の検討に依つて始ど征服し盡くされた。その功績に酬いるために、カーネギー研究所では博士を海外研究員に推薦した。

かくて千九百三年四月、博士は歐洲に渡り、先づデンマークに直行し、コペンハーゲンなる國立血清藥院に入つた。

盡(尽)
酬(酬)いる

千九百三年
明治三十六年。
デンマーク
ヨーロッパ中部
の王國。

コペンハーゲン
デンマーク國の
首府。

ロックフェラー
米國の大富豪、
スタンダード石
油會社長、昭和
十二年歿。

千九百十四年
大正三年。

外國人でこゝに入學するのは博士が最初であつたので、同藥院では非常の好意を以て萬事に親切な指導を與へた。かくて博士は滿一年間同藥院で有益な研究を遂げて、翌年四月、英佛を経て米國に歸つた。

當時ロックフェラー氏は最初の資金として百萬圓を投げ出して醫學研究所を創立し、所長としてフレキシナー氏を招聘することになつた。所長の外七人といふ限られた研究所員の一人に、日本人たる博士の加はつてゐたことは、米國醫學社會の驚異であつた。

この研究所に於ても、博士は著しく業績を挙げ、見る／＼うちにその地位を陞せられ、躍進また躍進、千九百十四年に

は忽ち研究所正員の地位を獲得した。これ實に博士が三十九歳の時である。

この時まで博士が完成した新研究は百種以上に達した。他の學者が一生涯かゝつても成し得ない研究を、僅か十年の間に成し遂げた博士の精力、知力は、到底人間業とは信ぜられないほどであつた。

これより先、明治四十四年に博士は二三の論文を京都帝國大學に提出したが、固より學界にとつて貴重な研究であつたので、大學教授會では滿腔の敬意を表すると共に、醫學博士の學位を授與することを決定した。

大正三年に至り、博士は更に新研究の論文を東京帝國大

間(間)

學に提出した。それは醫學方面よりも、寧ろ一般生物に關係を有する發見であつたので、同大學では理學博士の學位を授與した。この事實は、博士が故國に對しても、既に確乎不拔の學者的地位を占めてゐることを明らかに示した。千九百十三年、ドイツ國の主催で、ベルリンに萬國醫學會が開催された。博士は、同學會の招聘に依つて渡歐した。十年前とは事かはり、今度は大醫學者として、又ロツクフェラー研究所代表員としての渡歐であるから、非常の光榮であると共に重大な責任であつたのである。會議は一週間に亙つた。博士は、多年の研究に成る豊富な材料を提げて、滔々と發表演説を試みた。会場には歐米

互(互)
豊(豊)

諸國はいふまでもなく、日本、支那、南阿、南米等の各代表者が雲の如く來集してゐたが、何れも博士の底知れぬ該博な研究報告に驚き、肅然として傾聽した。

次いで講演者に對して各國學者の質問が開始された。

博士はこれに對して一々明答を與へたのみならず、ドイツ語で質問する者にはドイツ語を以て答へ、英語で質問する者には英語で、フランス語で來る者にはフランス語で懇切丁寧に答へた。これには、世界各國の老博士たちも全く感嘆してしまつた。博士は實にこの醫學會に於ける唯一最大の花形であつた。

博士は、更にイギリスやフランスの學會にも招聘されて、

唯一最大の花形

醫學界の明星

十數回の講演を試みた。「當代醫學會の明星來る。」などと各新聞は筆を揃へて特報した。

當時、フランス大使としてパリに駐割してゐた石井菊次郎氏がある朝有力なフランス新聞に、「日本の生んだ近代の驚異野口英世博士來る。」といふ三段抜きの大標題で書かれた記事を読んで驚愕したのもこの時である。事實石井大使は野口英世が何者であるかを知らなかつたのである。長い新聞記事を読み終つたとき、石井大使は思はず涙ぐんだ。そして、これまでにない、日本人としての高い矜恃を感じ、日本の名を花のパリーにまで輝かしてくれた博士に心から感謝した。

石井菊次郎
千葉縣の人、慶
應二年(五三)
生、子爵、樞密
顧問官、外交官。

その夜、博士のホテルに訪ねて行つた石井大使は、博士の手を固く握りしめ、晚餐を共にして、日本人が學術的に世界を壓倒し得ることの實證を示してくれた博士に對する最高の敬意を表した。

〔野口英世博士傳に據る〕

二一 我が幼時

新井白石

新井白石
江戸時代の學者
將軍家宣の侍講
名は君美
江戸の人
享保十年
歿年六十九

我が六歳の夏の頃、上松といひし人の少し文字などありしが、七言絶句の詩一首教へてその意を解き聞かせしに、やがて誦をなしければ、三首まで教へられしを、人にも講じ聞かせたりき。「この兒文才あり。いかにも師を擇びて學ば

利根、氣根、黄金の三、こんなくしては、學匠はなり難し。

戸部



新井白石

しめらるべし。」など、かの人もいひしかど、頑なる昔人たちのいひしは、「昔より言ひ傳へし事あり。利根、氣根、黄金の三、こんなくしては、學匠はなり難し」といふなり。この兒、利根こそ生れつきたらめ、なほ幼くして、その氣根のほどもはかり難く、家富めりとも見えねば、黄金のことも心得られず。などいひき。我が父も「この兒、戸部の御いつくしみによりて、常に側を離れ參らせず、學に入れ師に従はしめんこともかなひ難し。されど幼きより物書くことを、戸部も人々

に語り誇らせ給ひしことなれば、せめて物をば書き習はしめたくこそ侍れ。」とて、我が八歳の秋、戸部の上總國に行き給ひしあとにて、手習ふことを教へしめらる。

その冬十二月なかば、戸部歸り参り給ひしかば、常に傍らに侍ふこと故の如く、明けの年の秋、又國に行き給ひしあとにて、課を立てられて、日の中に行草の字三千、夜に入りて一千を限りて書き出すべし。」と命ぜられたり。冬に至りぬれば、日短くなりて、課はまだ満たざるに日暮れんとすること度々にて、西向なる竹縁のある上に机を持ち出でて書き終へぬることもありき。又夜に入りて手習ふに、睡の催して堪へ難きに、われに附けられし者と密かに謀りて、水二桶づ

つかの竹縁に汲み置かせて、いたく睡の催しぬれば、衣脱ぎ棄て、まづ一桶の水をかぶりて、衣打ち着て習ふに、初めは冷やかなるに目覺むる心地すれど、暫し程經ぬれば、身暖かになりて、また睡くなりぬれば、水をかぶること前の如くす。二たび水をかぶりぬるほどには、おほやうは課も満てたりき。これ我が九歳の秋冬の間の事なり。

かゝりしほどに、この頃よりは我が父の人に贈り給ふ文をば、かたの如くには書きたり。十一歳の秋、また課を立てられて、庭訓往來を習はしめられ、十一月に至りて、十日の中に淨寫して参らすべしと命ぜられ、命ぜられし如くに事を終へしかば、冊になして戸部に見せ参らす。賞め給ふこと

戸部の人と贈答し給ふほどの文。

大方ならず。十三の時よりは、戸部の人と贈答し給ふほどの文ども、大方は我れに命ぜられき。

又十一歳の時に、我が父の友の關といひし人の子供は太刀打の技に勝れて、人に教ふることありしを、我れにもこの技教へられんことを望みしに、わぬし未だ幼し。これ等の技學ばんことなほ早かり。といふ。「さこそ侍るべけれど、太刀使ふ事少しも心得ざらんには、刀脇差、腰にせんこと誠に不用の事にや。」といひしかば、「のたまふところ、誠に然なり。」とて、傳へて習はしめたり。かゝりしほどに、その年十六になりし者の、我れと藝を試みんといひしかば、木刀を執りて三たび合ひて、三たびまで勝つことを得たりしにぞ、人々も亦

興に入りて笑ひける。

〔折焚く柴の記〕

二二 歩いた途

河井 醉茗

河井醉茗
詩人
名は又平
明治七年堺市に
生れた

私の歩いたあとには

花が咲いた。

私の歩いたあとには

泉が涌いた。

私の歩いた時には

荆棘の途であつたが。

私の歩いた時には

石くれの途であつたが。

そんな美しい花が
 咲かうとは思はなかつた。
 そんな清らかな泉が
 涌かうとは思はなかつた。

たゞ一步一步顧みて
 静かに歩いた。
 たゞ一瞬一瞬心から
 踏みしめて歩いた。

私はやはり
 良い途を歩いたのだらう。

荆棘の刺にさゝれたけれど――。
 石のかけらにも躓いたけれど――。

二三 紋所の話

沼田 頼輔 (講演)

我が國では、家があれば苗字があります。そして苗字があれば必ず紋所があり、近頃は白襟黒紋付とも申す位で、禮服には必ず紋所を付ける事になつて居りますが、さて其の紋所に關する知識はといふと、由來は勿論、名前すら知られてゐない場合が澤山あります。私は常に之れを遺憾として居りましたが、先年山内侯爵家の家史編纂を依頼されて

沼田頼輔
 紋章學者
 文學博士
 神奈川県の人
 昭和九年
 年六十八

紋所の研究に没頭することになつた動機。

居りました頃、同家で桐の替紋を用ゐて居られる事について理解しかねて困つたことがありました。又その後、歐洲大戦争の終はらうとする時分に、大阪朝日新聞社から白耳義國王に鶴丸の紋の附いた太刀を献上する企てがあり、同社の海外特派員が、その紋所の由來につき邦人に尋ねたが解らなかつた爲め、英國の紋章學者に尋ねて、御下問の折の参考にしたといふ事を聞き及んで、甚だ遺憾に思つた事がありました。さやうな事が動機となつて、私は紋所の研究に没頭することになりましたが、その取調に基き、我が國の紋章が、どう云ふ意味で用ゐられたかといふ事について、極めて大體のお話をして見たいと思ふのであります。

紋章の起原

我が國の紋章といふものは、本來、武家時代に、或る標章を旗や幕の目印として使つたのに始まつたので、その結果武張つた意味を含んだ紋章が非常に多いのである。

尙武的紋章

我が國の紋章と云ふものは、本來、武家時代に、或る標章を旗や幕の目印として使つたのに始まつたので、その結果武張つた意味を含んだ紋章が非常に多いのであります。例へば、劔^{けん}酢^そ漿^{じやう}卓^{たか}、劔^{けん}葵^{あひ}、劔^{けん}桔^か梗^{げい}など云つて、劔を花の間に取合はせて居るのがそれで、そのみならず、兜の鍬形や、總角や、脛楯や、その他弓矢は勿論、武器に關するものは、悉く紋所に用ゐられて居ると云つてもよいのであります。但し斯う云ふ武張つた紋所は多く武家に用ゐられたので、お公家衆には、かやうな紋所を用ゐて居るのが少しもありません。それ故私はこの種類の紋所を、尙武的紋章と申して居ります。之れを第一種として、第二種は、戦争の際の功名手柄を後

記念的紋章
戦争の際の功名
手柄を後世に傳
へる爲めに作つ
た紋章。

世に傳へる爲めに作つた紋章で、私はこれを記念的紋章と名づけて居ります。例へば徳富蘇峰氏の紋所を見ますと、八角の中に巴が畫かれてあります。八角と云ふのは隅切



の折敷と申して、神様に供物を上げる時に用ゐるものであります。徳富氏のお話に依りますと、氏の先祖の方が天草の戦争の折に、敵の大將の首を取られ、之れを首實檢に供する爲めに、隅切折敷に載せて大將の見參に備へられた、それに因んで此の紋所を作られたと言ふことで、巴は昔から、一つ頭、二つ頭などと呼んだものですから、これを敵の大將の首に擬へ、折敷に載せて、新らしい紋所を組み立てたといふことは、いかにも武家に相應はしい話であります。斯う云ふ種類の紋所は澤山あつて、例へば關ヶ原の合戦に、土佐の榎井と云ふ士が、平塚爲家と云ふ大將の首を取つた記念に、生首を紋にしたなどいふ事もありました。源平屋島の戦

に那須與一が平家の扇を射落した、其の晴れやかな功名を
偲ぶ爲めに、其の子孫の中には、日の丸の扇を紋所に用ゐて
居るものがあるといふことであります。

指示的紋章
苗字に因んだもの。

第三種は私が指示的紋章と名づけて居るもので、概して
苗字に因んだものであります。例へば吉野といふ苗字の
者が櫻の花を紋所にし、堀井、酒井、駒井、井伊、澤井などいふ井
の字の附く苗字の者が、井の字、或は井桁、井筒などを用ゐる
類で、是等は其の紋所を見て、是れが何家の紋所かと云ふ事
がすぐに指示されるやうに作られたものであります。近
藤、遠藤、伊藤、佐藤、加藤、工藤、内藤といふ苗字の家が、比較的
多く藤の紋所を用ゐて居るのも、此の種類に屬します。藤の

紋所については藤原氏から出た家が用ゐると云ふやうな
説もありますが、全くの誤りで、それは、雲上明覽といふ書物
に據ると、藤原氏から出た公家が總計九十七軒あつて、その
中藤の紋を用ゐて居るものが僅か七家だけしかないのを見
てもわかります。

尙美的紋章
公家の家々にて
裝飾に用ゐた文
様を紋所にした
もの。

第四種は尙美的紋章と云ふので、これは多くお公家さん
の家に用ゐられました。お公家さんには家々によつて、衣
裳や車などの裝飾に、代々極まつて用ゐられた文様がありま
したが、それを紋所にしたのがこれです。例へば、花
山院家の杜若、或は今出川家の楓、久我家の龍膽の如きは、い
づれも車や着物の文様として用ゐられたものが、後世紋所

が行はれるやうになつてから、其の方面に轉用されたものであります。是等の紋所は、もと單に美しいといふ好みによつて用ゐる始められたものであるから、尙美的紋章といふべきもので、それは概して文様から移つて來たものであります。

第五種は信仰の意味から用ゐられたもの、即ち信仰的紋章ともいふべきもので、是れには隨分澤山の種類があります。例へば戰國時代にはキリスト教が盛んに行はれたので、此の教を信ずる者は、多くクロッスを紋所と致しました。その一例を擧げると、有名な賤ヶ岳の戰に討死をした、中川清秀は、當時の名高いキリスト教信者でありました。それ

信仰的紋章
信仰の意味から
用ゐたもの。

中川清秀
信長に仕へた武
將
天正十一年戰死
年四十二

故、其の子孫は、今でも「中川クルス」と稱して、パテント、クルスと云ふものを用ゐて居ります。備前の岡山、因幡の鳥取、この兩池田侯爵家は、祇園守といふ紋所を用ゐて居りますが、これはキリスト教のアンドルーの十字架から出たものであります。御承知の如く、島原の亂以來、キリスト教は厳しい國禁となつて、之れを信ずるものは、大名でも、士でも、或は死刑に處せられ、或は家祿を召上げられると云ふ様な事になつて、此の教に關係のあるものは、片端からその影を潜めました。それが、それにもかゝらず、戰國時代にキリスト教を信じた大名の子孫は、大抵此の紋を用ゐて居りました。

信仰的紋章の中で、神様に關係のあるものは、比較的澤山

あります。例へば鳥居、瑞籬、欄干、御幣、額、瓶子、干木、鯉木などが、これをしてもさすがに日本は神の國だと思はれます。これに反して佛教關係の紋所は多くありませんが、これは神道の現世的なるに反して、佛教が超現世的なるに本づくのでありませう。仙石子爵の紋所が「無」の字を用ゐて居るのは、禪宗の「趙州無字」と云ふ故事から來たので、少ない例の一つであります。

我々の家に紋所があるやうに、神社にも亦社紋と云つて極つた紋所を用ゐてゐるのがあります。例へば、天満宮の梅鉢の紋、諏訪神社の梶葉の紋、八幡宮の巴の紋、出雲大社の

趙州無字

神社にも社紋と云つて極つた紋所を用ゐて居るのがある。

龜甲に「有」の字の紋の如きが、それであります。出雲で「有」と云ふ字を用ゐるのは、社傳に據ると、出雲では、祭神の大國主尊が杵築に鎮座せられたのが十月であつたといふので、此の月を鎮座月と申して居りますが、十月の二字を組み合はせると「有」の字になるので、それを神紋に定めたのであると申します。とにかく我が國では、家にも神社にも定まつた紋章があつて、それに歴史的精神的の重大なる意義があるのでありますから、紋所の研究がその方面の關係學に取つて大切であるばかりでなく、之れについて一通りの知識と趣味とを持つことは、修養ある國民の一種の嗜みともいふべきであります。

芳賀矢一
國文學者
文學博士
昭和二年
年六十二
かういふ

二四 美しき國民性 芳賀 矢一

しのぶのすり衣
陸奥國(福島縣)
信夫郡にある石
の面に絹布をあ
てて石のきめを
すり出したも
の、後世はしの
ぶ草ですり染す
る。

氣候は溫和である。山川は秀麗である。花紅葉四季を
りをりの風景はまことに美しい。かういふ國土の住民が
現生活に執著するのは自然である。現世を愛し人生生活
を楽しむ國民が、天地山川を愛し、自然にあこがれるのも當
然である。日本の娘の著物の模様のはでやかなのは、西洋
人の著書にも何時も歎賞してあるが、日本の秋の野の景色
を見れば、尙更これよりも綺麗である。自然に衣服にもこ
れが染つて来る。昔のしのぶのすり衣、今の振袖模様、裾模
様、つまりは同じ事である。菊や、櫻や、梅や、牡丹を大きく染

吹く風を云々
「吹く風を勿來
の關と思へども
道もせにちる山
櫻かな」(千載
集、源義家)
行暮れて云々

出した友禪縮緬や、繻珍の帯から下駄の鼻緒の先まで、自然
界の草木花模様で飾られてある。その色合の名稱でも、櫻
色、桃色、山吹色、栗色、ぶだう色など、植物界から取つた名が多
い。昔の女装束は櫻重、梅重、山吹重など、重ねの色合は常に
四季をりをりの花に因んであつた。裾には大海の景色を
描き、腰には唐草を縫つてある。優しい女流の装束は當然
とも言はうが、武士の戦争にいでたつ甲冑装束にも、小櫻を
どし、卯の花をどし、おもだかをどしなど、いかにも優美では
ないか。總じて我が國の鎧甲冑は、當時の平服のはでやか
なのに似合つて、いかにも美しいものであつた。それであ
るから「吹く風を勿來の關と歌ひ、行暮れて木の下かげをと

「行暮れて木の
下かげを宿とせ
ば花や今宵のあ
るじならまし」
(平家物語、平忠
度)

歌つても、よく似合ふのである。西洋の蝦甲冑では似合ふものではない。

更に我等の日常がいかに植物及び自然界に關係を有するかを、食物の方面に見れば、春秋の彼岸の牡丹餅、お萩の名を第一として、菓子屋の目錄を一見して、一層その多い事がわかる。松風、紅梅焼、磯松、桃山などの一般名稱は言ふまでもなく、櫻餅、鶯餅、かしは餅の外、自然界の現象に取つたものでも、洲濱時雨、越の雪、落雁、しほがま、さゞれ石などの類がある。名稱ばかりではない、形も花木に取るのが多い。干菓子には別して松の葉や菊の花、すべて花木の形に作り、汁粉なども十二月に分けて、それ／＼の雅名を附けたりする。

また下戸の領分ばかりでなく、酒にも櫻正宗がある。菊正宗がある。山川の白酒がある。蓬萊の島臺は今も儀式の時に用ゐられるが、魚類の料理もまた植物界、自然界とは離れぬ。刺身やすしには笹の葉を敷く。牡丹餅や赤飯を配るのに重箱に南天の葉を敷く。これは毒を消すとかいふまじなひから來たものでもあらうが、かしはでの名残もあらう。

料理の膳椀は金蒔繪で花木の形を裝飾とする。漆器、陶器一切の美術工藝品が草木花鳥の繪である事は、もとより言ふまでもない。それは裝飾美術として、近世のヨーロッパの美術に少からぬ影響を與へたものである。茶の湯の

伎倆(技倆)

なつめなどは當然としても、俗に陶製のさじを蓮華と言ふなども優美である。

插花の術、箱庭作り、盆景の山水、皆我が國人獨得の伎倆であつて、獨得の發達をしてゐる。繪畫では生きくゝとした花木の色、禽鳥の飛動してゐるさまなど、西洋の靜物に馴れた目から見たら、珍しく感ずるに違ない。すべて花を活けるにも、それを描くにも、その生きたまゝに、自然のまゝにするのが美しい點である。枝からむしり取つて花ばかり挿しこむのは西洋の花瓶であるが、自然の枝振をそのまゝに、天地の配合よろしく表すのが、活花でも、盆栽でも日本人の長所である。日本人は眞に自然の友である。よく自然の

描く、畫が、

表す、表す、表す、

心を解した者である。

四季の風光は一日も我が國民の頭から離れた事はない。この四季の景色と人事とを結び附けて感ずる事は、即ちあはれを知るのである。源義家や源頼政や、平忠度が、いかに日本武士として優に優しく感じられるのは、このあはれを知つたといふ事があるからである。太田道灌に關する「みの一つだになきぞ悲しき」の話は、史實ではなくして傳説であらうが、歌を好んだ武士であるから、あゝいふ傳説が附いたのである。頼朝も、尊氏も、秀吉も、暇のある時は風流の技をもてあそんだのである。風流といふ事、詩的といふ事の意味は自然に向つてのあこがれが、その大半を形作つて

太田道灌

名は持資、戰國時代の武將。文明十八年(一一四六年)歿、年五十五。みの一つだに云々

「七重八重花は咲けども山吹のみの一つだになきぞ悲しき」(後拾遺集、兼明親王)

あるのである。日本の武士道は、西洋の騎士道の如く婦人を崇拜せぬ代りに、自然の花を愛し、もののあはれを解したのである。

英雄豪傑ばかりではない、日本人程國民全體が詩人的なのは、恐らくは世界中にあるまい。歌心は誰にでもある。今日日本で歌を作る人はどのくらゐの數であらう。宮内省への毎年の詠進は何萬といふ數である。歌を作らないでも俳句を作る。どんな片田舎にも俳句の宗匠はある。神社奉納の額面は到る處に小詩人の名を列ねてゐる。短くて作り易い短詩形であるから、上手でこそなければ、何人も作つて、花見、遊山の時にも一興とするのである。この花見

といひ、雪見といひ、月見といひ、春は花、秋は紅葉、小詩人はまことに忙しいのである。悪事をはたらいて死刑に處せられる大悪人でも、死に臨んでは一首を口ずさむといふやうなのは、恐らくは他國にはない事であらう。我が國民は全國民を擧げて抒情詩人である。敘景詩人であると言つてもよいのである。

それ故我が國民は、隱居すれば盆栽いぢりをする。歌や、插花に慰安を求める。昔は罪なくして配所の月を見たいと言ふ人もあつたが、日本人が世の中を厭ふと言へば、風流三昧に日を送る。西洋で言ふ厭世は、ほんたうにこの世の中が厭になるのである。自殺するより外に方法がない。

栽一裁

罪なくして云々
源顯基のこと。
永承二年（一一七二
年）歿、年四十
八。
味一味
ほんたう

西行法師

鎌倉時代初期の歌僧。俗名は佐藤義清。建久元年(八五〇年)寂。年七十三。

鴨長明

鎌倉時代の歌人。法名蓮胤。方丈記の著者。

深草の元政

江戸時代初期の隠者。寛文八年(一三六六年)歿。年四十六。

太田垣蓮月

京都の人。和歌諸藝を善くした。明治八年(一八七五年)歿。年八十五。

日本人の厭世は人事社會がうるさいのである。人事社會から遠ざかつて花鳥風月に近づけば、それで厭な思はなくなるのである。西行法師が世を遁れたと言つても、一生行脚して花月を楽しんでゐた。鴨長明も頻りに世の中をあぢきなく思つたが、庵室にはいつて自然を楽しんで満足してゐた。その他深草の元政上人でも、近い頃の太田垣蓮月でも、世の中に立交るのは厭でも、自然といふ樂地は別にあつたのである。

〔國民性十論〕

二五 魚の骨

細川潤次郎

細川潤次郎

明治大正の學者。貴族院議員、樞密顧問官等に歴任す。男爵。高知の人。大正十二年歿。年九十。

中村正直

幕末より明治にかけての學者、教育家、文學博士、敬字と號す。江戸の人。明治二十四年歿。年六十。



細川潤次郎

亡友中村正直門人に對し演説せしことありけり。正直の幼き頃、食事の時、誤りて魚の骨を咽に引き立て、親にも心配せさせ、自分も迷惑せしことありければ、魚を食ふごとに用心すれども、今も猶ほ折々は小さき骨の咽に障ることなきにあらず。日々の食事なれば經驗も十分なるべきに、夫れすら過ちなきは難きことなるを、まして卒爾の際、偶然の事につけては、いかで過ちなかるべき。少壯の人々はよく、注意すべきことなりと、懇ろに諭されしとなり。門人共之れを聞き、先生は和

漢洋の碩學なれば、演説の材料はいくらもありぬべきを、夫れらをば引きもし給はで、孰れにも能く分りたることをくだくしくも説き給へるもの哉と、窃につぶやきたるもありきとて、心ある人は残り多く思へるにや、かくは余に語りたりき。

阿波の鳴門

阿波、淡路の間なる鳴門の瀬を舟にて押渡ること五十餘年になりて、舟人の頭となれるものありけり。或人之れに向ひて、鳴門の舟路いかかと問ふに、知らずと答へたり。問ふもの、これは心得ぬことなり、御身此の海を知らぬことやあるべき。舟人の頭いふ、御不審はことわりなれど、かく答

ふるは舟人のおきてにて、誰れに問はれても、いつもかく申すこととなれり。鳴門は世に聞えたる波あらしき處なれば、幾度ゆきかふとも知れりとは思ふべからず、はじめて乗り

溝漕通ずる所田
乾かず、稻花萬
頭露薄々たり、
石湖の詩句吾れ
猶ほ記す、雨を
忌み風を嫌ひ更
に寒さに怯ゆ。
稻將に熱せ
んとす
九十翁十洲

蹟筆郎次潤川細

試みる時の
如く思ひて
用心の上に
も用心すべ

し。舟の鳴門にかゝりぬるときは、われら舟人に下知して、こゝははじめての舟路なるぞ、鳴門の難處なることは聞き及びつらん、舵はよきか、帆はよきか、荷物の積方はよきかなどいひつゝ、十分の用意したる後、舟を進むるためしなりと

答へたりとぞ。世の中を渡るにも、此の舟人の頭の如く心
せんには、危き事に出逢はざらむかし。

手鹽皿

吾が故郷
高知市

手鹽皿はいつの頃よりおしなべて用ゐるそめけん。吾が
故郷にては、百數十年の前までは、此の品なかりしと見ゆ。
ある老人の話に、冬の夕、或侍の家に一人の友來りて、火桶に
打向ひ様々の物語する折しも、燈のかなたに老いたる母の
絲車をひき居たりしが、若者共の話の興を助けんとて、手箱
の中よりいさゝかの錢取り出だし、これにて豆腐にても買
ひ來り、有り合はせの酒あたゝめて、今宵の寒さを防ぐべし
とありければ、母の仰せのごとく豆腐を買ひ來りけるが、煮

過分のこと

ることとせず、醬油をそゝぎかけて酒の肴にしけり。杯の
數かさなりけるころ、主の侍其の友にむかひ、御免あれと挨拶
して障子の外に出でけるが、やがて庭木の枯葉の風なき
に騒ぐやうなる音しきりなりければ、其の友怪しく思ひて
障子を開き見るに、主の侍の柏の木に昇りたるに紛れも
なければ、いとあやしみ、何故かくし給ふぞと問へば、主の侍
は、冷かなる豆腐を掌におくことの快からねば、此の柏の枯
葉を摘みとりて、之れに盛らんと思ふなりといらへければ、
そは過分のことなりとて止めけりとなむ。

【名なしぐべい】

二六 史傳を讀むべし

大町 桂月

大町桂月
文學者
名は芳衛
高知市の人
大正十四年歿
年五十七

青年はいかなる書物を讀むべきかとの御問に對し、
卑見左に申し述べ候。

人は何人も模擬性を有し居り候。また感染性を有し居り候。而して一生のうちこの二性の最も熾んなるは少年時代若しくは青年時代に候。どちらかと申せば、模擬性は少年の方が強く、感染性は青年の方が強く候。君子に接すれば君子に感染し、小人に接すれば小人に感染し、豪傑に接すれば豪傑に感染し、小才子に

接すれば小才子に感染するものに候へば、讀物の選擇もこれより割出さざるべからずと存じ候。

この頃の青年の一般の缺點は歴史傳記の知識に乏しき事に候。随つて今の青年は、聖人、君子、英雄、豪傑、志士、仁人、大學者、大宗教家、忠臣、孝子などに接する事極めて少く、随つて人物が小さくなり、眼界が狭くなりて、神經のみが尖り申し候。これ實に國家百年の大患に候。故に小生は大呼す、請ふ、大いに史傳を讀まれよ。」と。

また一つ、今の青年に通じたる缺點これあり候。それは箇人的若しくは孤立的といふ點に候。即ち前代と絶縁して、己一代と思ふ考が餘りに強く候。随つて重

神經が尖る

國家百年の大患

箇(個)

己一代、己

積善之家必有餘慶、積不善之家必有餘殃。
(易經)

厚雄大の氣風なくして、こせくちよこくする小人物が多く候。これも史傳に親しまぬより起る事に候。史傳を讀まば、積善の家には餘慶あり、積不善の家には餘殃あり。といふ事がよく解り申すべく、行がおのづから重厚になり申すべく、人物もどつしりとして參り申すべく候。

申すまでもこれなく候へども、國家の盛衰興亡は、全く人物の有無如何にこれあり候。盛んなる國も人物なければ忽ち衰へ、振はざる國も人物あれば忽ち振ひ申し候。我が國將來の發展に就いても、國民の人格を重厚雄大ならしむるが最大急務なりと確信致し候。

消絶
ええ

人格を重厚雄大ならしむるには、史傳に親しみて偉人に感染するに若くはなしと存じ候。聖賢の遺著は史傳を歸納したるものに候へば、史傳と共に常に座右に置き、日夕絶えず讀誦なさるべく候。さらば卑怯鄙吝の念次第に消えて、心が公明正大になり申すべく候。文學も古きものは精神の香高く、人の心を淨化致し候へども、近時の文學物には、動もすれば人を誤るもの多く候へば、その選擇には深き注意を要すべく候。

〔新學生訓〕

八代六郎

海軍大將

樞密顧問官

男爵

愛知縣の人

昭和五年没

年七十

わが國は

御題「神祇」

す五

二七 明治天皇御製頌歌 八代六郎

一

御製「わが國は神のするなり神祭る

昔の手ぶり忘るなよゆめ。」

いましめて範示のびしめします

大君の尊き御業よ。

神の代の聖きならひを

わすれめや、われら國民。

二

御製「人もわれも道を守りてかはらずば

人もわれも
御題「國」

この敷島の國はうごかじ。」

奥山のおどろが下も

大君のみさとししるく

ゆく道はただのひとすぢ

ふみ行かん、われら國民。

三

御製「たらちねの親につかへてまめなるが

人のまことの始めなりけり。」

そのまこと捧げてもちて、

なべてわが親にいます

大君につかへまつらん、

奥山の

奥山のおどろが
下も踏みわけ
て、道ある世ぞ
と人に知らせん
(後鳥羽天皇御
製)

たらちねの
御題「孝」

います

光榮はえの子ら、われら國民。

四

おのが身は
御題「義」
ぞ…ける

御製「おのが身はかへりみずして人のため

盡くすぞひとの務なりける。」

はなばなし榮ある務、

われならず人のためのみ

家のため國のためのみ

盡くしなん、われら國民。

盡くしなん

五

よもの海
御題「正述」心
緒こ
さわぐ

御製「よもの海みなはらからと思ふ世に

など波風のたちさわぐらん。」

むら雲の上も月澄む、

大君の尊き御心

外とつ國も仰ぎまつれり、

畏めや、われら國民。

六

おほぞらに
御題「峯」
そびえ

御製「おほぞらにそびえて見ゆるたかねにも

登ればのぼる道はありけり。」

仰ぎ見る高峰ののぞみ、

その道のよし嶮しくも

いや仰ぎいや讚へつゝ

登りなん、われら國民。〔國民歌謡曲集〕

讀(讀)

純正國語讀本卷二終



昭和十二年七月廿五日發行
昭和十三年七月廿五日發行
昭和十四年七月廿五日發行
昭和十五年七月廿五日發行
昭和十六年八月廿五日發行

純正國語讀本改訂版
各卷定價金六十錢



編纂者 五十嵐 力

發行者 山田 謙吉
東京市牛込區原町二丁目四十六番地

印刷者 五十嵐 良晃
東京市牛込區榎町七番地

發行所 東京市牛込區原町二ノ四六 早稻田圖書出版社

配給元 東京市神田區淡路町二丁目九番地 日本出版配給株式會社

振替東京一三六一五三番

